

だい したいせき
台の下遺跡9区

—漁業集落防災機能強化事業集会所施設用地整備—

台の下遺跡9区

二〇一八年三月

気仙沼市教育委員会

2018年3月

気仙沼市教育委員会

だい し たい せ き 台の下遺跡9区

—漁業集落防災機能強化事業集会所施設用地整備—

2018年3月

気仙沼市教育委員会

台の下遺跡 9区 遠景（北西方向から）



序 文

この報告書は、東日本大震災の復興事業に係る気仙沼市唐桑町大沢地区の漁業集落防災機能強化事業集会所施設用地整備に伴って、平成 28 年度に実施した気仙沼市唐桑町に所在する台の下遺跡 9 区の発掘調査の記録です。

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震が引き起こした巨大津波は、東日本沿岸部を襲い、本市においても沿岸部を中心壊滅的な被害をもたらしました。被災家屋約 26,000 棟、被災世帯約 9,500 世帯、1,300 人を超える尊い命が犠牲となりました。

未曾有の大震災から一日も早い復旧・復興を目指し、個人での住宅再建をはじめ、高台への集団移転、各種産業施設やインフラ関係等で大規模な復興事業に伴い、埋蔵文化財とのかかわりが急増いたしました。

本市には、縄文時代の貝塚や集落跡、中世の城館跡など 180 ケ所以上の遺跡が知られていますが、これらの多くは沿岸部の丘陵地帯に立地しているため、津波の浸水域を避けた土地を求める場合、必然的に埋蔵文化財とのかかわりが発生する可能性が増大するという地理的状況にあります。

気仙沼市教育委員会では、復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の適切な保護との両立を図るために、専門職員の新規採用や再任用、任期付き職員の採用に加え、宮城県や他の自治体へ派遣要請を行い、埋蔵文化財に対応する専門職員を確保するほか、宮城県教育委員会はじめ関係機関に調査支援を要請するなど調査体制を整備してまいりました。

台の下遺跡では、平成 25・26 年度に防災集団移転促進事業に伴って調査が行われ、縄文時代の竪穴住居跡・墓域、多くの骨角器を含む貝層などが確認され、当時のムラの様子や暮らしぶりが明らかになりました。

今回の調査では、縄文時代の貯蔵穴、縄文土器や石器の捨て場、平安時代の鍛冶炉やカマドを伴う竪穴住居跡など、多くの遺構・遺物が数多く発見されました。特に平安時代の鍛冶関連遺構は気仙沼市では初めての発見となり、当時の人々の生活及び地域の歴史を知る上で大変貴重な資料となるものと考えます。

本報告書が、多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する正しい理解と認識を深めていただくとともに文化財保護の普及・啓発や研究などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘から報告書刊行までの一連の調査にあたり、御協力頂きました宮城県教育委員会、本市の埋蔵文化財調査のためご支援を頂いた派遣職員の皆様並びに派遣元自治体の皆様、発掘作業、整理作業に従事された方々など、多くの関係者・関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 30 年 3 月

気仙沼市教育委員会

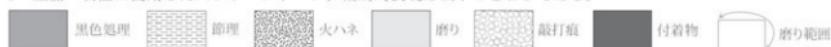
教育長 齋藤 益男

例 言

- 1 本書は、平成 28 年度に実施した東日本大震災の復興事業に伴う漁業集落防災機能強化事業集会施設用地整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 台の下遺跡 9 区の発掘調査は、平成 28 年度に気仙沼市教育委員会が宮城県文化財保護課の支援を受けて実施し、すべて完了した。
- 3 台の下遺跡 9 区の整理・報告書作成作業は、平成 28・29 年度に気仙沼市教育委員会が宮城県文化財保護課の支援を受けて気仙沼市文化財収納庫で実施した。
- 4 掘載遺物番号は通し番号であり、本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。
- 5 掘載遺構番号は、遺構の種類ごとに番号を付し、本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。
なお、遺構番号は調査時に付されたものから報告書掲載順に付け替えた。
- 6 平成 23 年度以降に発掘調査を実施した周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）には、アルファベット大文字の 3 文字で遺跡記号を付与した。台の下遺跡は「D A I」である。
- 7 発掘調査面積については、本書で記載するものを確定面積とする。
- 8 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 9 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は調査担当者が、空中写真は気仙沼市危機管理課が行った。
- 10 遺物への注記は、遺跡の記号を頭に、出土地点・出土層位・出土年月日を記入した。
- 11 整理・報告書作成作業における遺物の洗浄・注記・土器の接合・復元作業に係る業務は、気仙沼市教育委員会が宮城県文化財保護課の支援を受けて実施した。
- 12 整理・報告書作成作業における遺構のトレース図作成、遺物の実測図・トレース図作成、写真撮影及び観察表作成、編集、製本・印刷に係る業務は、「国際文化財株式会社」へ委託し、平木場が監修した。
- 13 炭化物の科学分析（年代測定・樹種同定）については、「パリノ・サーヴェイ研究所」に委託した。
- 14 鍛冶関連遺物の科学分析（金属学的調査）については、「日鉄住金テクノロジー株式会社」に委託した。
- 15 本書の執筆・編集は、平木場秀男が「国際文化財株式会社」の協力を得ながら行った。
- 16 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録類は、気仙沼市教育委員会が保管し、展示・活用を図る予定である。

凡 例

- 1 使用した遺構略号は、柱穴・ピット：P である。
- 2 遺構図の縮尺は、平面図・断面図とも挿図ごとに示した。
- 3 掘載遺物の縮尺は、土器が 1/3、石器は小型のものが 1/1、その他の石器が 1/3 を基本としたが、詳細は各図に示した。遺物写真的縮尺は、遺物実測図に準じた。
- 4 本書で使用した方位は磁北であるが、異なるものも含めて各図に示した。
- 5 調査成果の内容や土層の色調等の表現については、原則として現場担当者による注記等を採用した。
- 6 遺物の色調は『新版 標準土色帖』に基づく。
- 7 遺構図に使用したスクリーントーンは、その都度図中に示した。
- 8 土器・石器に使用したスクリーントーン・補助的表現は以下のとおりである。



本文目次

巻頭カラー

序文

例言・凡例

第Ⅰ章 東日本大震災後の対応	1	1 調査の概要	17
第1節 これまでの経緯(第1図)	1	2 遺構	17
第2節 調査体制	1	3 遺物	74
第Ⅱ章 調査の経過	4	第2節 平安時代の調査成果	88
第1節 調査に至るまでの経過	4	1 調査の概要	88
第2節 調査の組織	5	2 遺構	88
第Ⅲ章 遺跡の位置と環境	6	3 遺物	120
第1節 地理的環境	6	4 鍛治関連遺物	121
第2節 歴史的環境	6	第VI章 自然科学分析	126
第Ⅳ章 調査の概要と層序	10	1 年代測定および樹種同定	126
第1節 確認調査	10	2 鍛治関連遺物の金属学的分析	130
第2節 本調査	11	第VII章 総括	152
第3節 整理作業・報告書作成	14	1 繩文時代	152
第4節 層序	14	2 平安時代	153
第Ⅴ章 発掘調査の成果	17	3 鍛治関連遺構・遺物	154
第1節 繩文時代の調査成果	17	写真図版	155

挿 図

第1図 台の下遺跡 位置図	2
第2図 台の下遺跡の調査区及び主要遺構配置図	5
第3図 台の下遺跡 周辺遺跡図	9
第4図 台の下遺跡9区 確認トレンド配置図	12
第5図 台の下遺跡9区 土層断面柱状模式図	16
第6図 繩文時代 遺構配置図	18
第7図 繩文時代 挖立柱建物跡1号	20
第8図 繩文時代 挖立柱建物跡1号 出土遺物	21
第9図 繩文時代 挖立柱建物跡2号	22
第10図 繩文時代 埋設土器	23
第11図 繩文時代 土坑配置図	24
第12図 繩文時代 土坑1~7号	27
第13図 繩文時代 土坑8~13号	29
第14図 土坑7~10号 出土遺物	30
第15図 土坑11~13号 出土遺物	31
第16図 繩文時代 土坑15号	32
第17図 土坑15号 出土遺物①	33

目 次

第18図 土坑15号 出土遺物②	34
第19図 繩文時代 土坑16号	35
第20図 土坑16号 遺物出土状況	37
第21図 土坑16号 出土遺物①	38
第22図 土坑16号 出土遺物②	39
第23図 土坑16号 出土遺物③	40
第24図 土坑16号 出土遺物④	41
第25図 土坑16号 出土遺物⑤	42
第26図 土坑16号 出土遺物⑥	44
第27図 繩文時代 土坑14~20号	45
第28図 繩文時代 土坑21~24号	46
第29図 繩文時代 土坑25~26号	47
第30図 繩文時代 土坑27~29号	48
第31図 繩文時代 土坑30~32号	49
第32図 土坑19~32号 出土遺物	50
第33図 繩文時代 ピット配置図	52
第34図 繩文時代 ピット 出土遺物	53

第35図 縄文時代捨て場	55	第62図 穴住居跡1号出土遺物	94
第36図 捨て場出土土器①	57	第63図 平安時代 穴住居跡2号①	96
第37図 捨て場出土土器②	59	第64図 平安時代 穴住居跡2号②	97
第38図 捨て場出土土器③	60	第65図 穴住居跡2号出土遺物	99
第39図 捨て場出土土器④	61	第66図 平安時代 穴住居跡3号	100
第40図 捨て場出土土器⑤・土製品	62	第67図 平安時代 穴住居跡4号	101
第41図 捨て場出土石器①	64	第68図 穴住居跡4号 第Ⅰ期	102
第42図 捨て場出土石器②	65	第69図 穴住居跡4号 鍛冶炉	103
第43図 捨て場出土石器③	66	第70図 穴住居跡4号 第Ⅱ期	104
第44図 捨て場出土石器④	68	第71図 穴住居跡4号 貯蔵穴	104
第45図 捨て場出土石器⑤	69	第72図 穴住居跡4号 カマド①	105
第46図 捨て場出土石器⑥	70	第73図 穴住居跡4号 カマド②	106
第47図 捨て場出土石器⑦	71	第74図 穴住居跡4号 第Ⅲ期	107
第48図 捨て場出土石器⑧	72	第75図 穴住居跡4号 出土遺物①	109
第49図 捨て場出土石器⑨	73	第76図 穴住居跡4号 出土遺物②	110
第50図 縄文時代溝	73	第77図 穴住居跡4号 出土遺物③	111
第51図 縄文時代出土土器①	75	第78図 穴住居跡4号 出土遺物④	113
第52図 縄文時代出土土器②	76	第79図 平安時代 穴住居跡5・6号	114
第53図 縄文時代出土石器①	77	第80図 平安時代 土坑33号・34号	117
第54図 縄文時代出土石器②	78	第81図 平安時代 土坑35～41号	118
第55図 縄文時代出土石器③	79	第82図 平安時代 土坑・ピット配置図	119
第56図 縄文時代出土石器④	80	第83図 平安時代出土遺物	120
第57図 縄文時代出土石器⑤	81	第84図 平安時代 鍛冶関連遺物	121
第58図 平安時代遺構配置図①	89	第85図 台の下遺跡9区全体図	125
第59図 平安時代遺構配置図②	90	第86図 历年較正結果	128
第60図 平安時代 穴住居跡1号	92	第87図 平安時代 遺構出土土器一覧	154
第61図 穴住居跡1号鍛冶関連遺物出土状況	93		

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	10	第11表 縄文時代土製品観察表	84
第2表 台の下遺跡9区確認トレンド調査結果	12	第12表 縄文時代石器観察表1	84
第3表 挖立柱建物跡1号計測表	21	第13表 縄文時代石器観察表2	85
第4表 挖立柱建物跡2号計測表	23	第14表 縄文時代石器観察表3	86
第5表 縄文時代土坑規模計測表	51	第15表 縄文時代石器観察表4	87
第6表 縄文時代ピット規模計測表	54	第16表 平安時代土坑規模計測表	116
第7表 縄文時代土器観察表1	82	第17表 平安時代ピット規模計測表	119
第8表 縄文時代土器観察表2	83	第18表 鍛冶関連遺物集計表	122
第9表 縄文時代土器観察表3	84	第19表 鍛冶関連遺物出土量集計表	122
第10表 縄文時代土偶観察表	84	第20表 鍛冶関連遺物出土数集計表	122

第21表 平安時代 土器観察表	123
第22表 平安時代 土製支脚観察表	124
第23表 平安時代 石器観察表	124
第24表 鍛治関連遺物 観察表	124
第25表 放射性炭素年代測定結果	128
第26表 供試材の履歴と調査項目	142
第27表 供試材の科学組成	142
第28表 出土遺物の調査結果のまとめ	142
第29表 繩文時代 土器時代別分類表	152
第30表 繩文時代 石器種類別一覧表	153
第31表 繩文時代 石器石材組成表	153

図 版

図版1 炭化材	129
図版2 鍛治津・椀型鍛治津の顕微鏡組織	143
図版3 梗型鍛治津の顕微鏡組織	144
図版4 粒状津・鍛造剥片の顕微鏡組織	145
図版5 鍛造剥片・炉壁の顕微鏡組織	146
図版6 粒状津・鍛造剥片様遺物(鍛治津)の 顕微鏡組織	147
図版7 鍛造剥片・鍛造剥片様遺物(鍛造鉄器片)・ 炉壁の顕微鏡組織	148
図版8 炉内津(製錬津)の顕微鏡組織	149
図版9 鍛治津・鉄塊系遺物の顕微鏡組織	150
図版10 鉄塊系遺物顕微鏡組織・EPMA調査結果	151
図版11 遺跡全景ほか	155
図版12 繩文時代の遺構①(掘立柱建物跡1・2号)	156
図版13 繩文時代の遺構②(埋設土器・土坑1～ 4号)	157
図版14 繩文時代の遺構③(土坑5～12号)	158
図版15 繩文時代の遺構④(土坑13～16号)	159
図版16 繩文時代の遺構⑤(土坑16～21号)	160
図版17 繩文時代の遺構⑥(土坑22～32号・ P28)	161
図版18 繩文時代の遺構⑦(捨て場)	162
図版19 繩文時代 出土遺物1(掘立柱建物跡・ 土坑①)	163
図版20 繩文時代 出土遺物2(土坑②)	164
図版21 繩文時代 出土遺物3(土坑③)	165
図版22 繩文時代 出土遺物4(土坑④)	166
図版23 繩文時代 出土遺物5(土坑⑤)	167
図版24 繩文時代 出土遺物6(土坑⑥)	168

目 次

図版25 繩文時代 出土遺物7(土坑⑦)	169
図版26 繩文時代 出土遺物8(土坑⑧・ピット)	170
図版27 繩文時代 出土遺物9(捨て場①)	171
図版28 繩文時代 出土遺物10(捨て場②)	172
図版29 繩文時代 出土遺物11(捨て場③)	173
図版30 繩文時代 出土遺物12(捨て場④)	174
図版31 繩文時代 出土遺物13(捨て場⑤)	175
図版32 繩文時代 出土遺物14(捨て場⑥)	176
図版33 繩文時代 出土遺物15(捨て場⑦)	177
図版34 繩文時代 出土遺物16(捨て場⑧)	178
図版35 繩文時代 出土遺物17(捨て場⑨)	179
図版36 繩文時代 出土遺物18(包含層①)	180
図版37 繩文時代 出土遺物19(包含層②)	181
図版38 繩文時代 出土遺物20(包含層③)	182
図版39 繩文時代 出土遺物21(包含層④)	183
図版40 繩文時代 出土遺物22(包含層⑤)	184
図版41 平安時代の遺構①(竪穴住居跡1～4号)	185
図版42 平安時代の遺構②(竪穴住居跡1号)	186
図版43 平安時代の遺構③(竪穴住居跡2・3号)	187
図版44 平安時代の遺構④(竪穴住居跡4号)	188
図版45 平安時代の遺構⑤(竪穴住居跡4～6号)	189
図版46 平安時代の遺構⑥(土坑33～41号)	190
図版47 平安時代出土遺物1(竪穴住居跡1 ・2号)	191
図版48 平安時代出土遺物2(竪穴住居跡4号①)	192
図版49 平安時代出土遺物3(竪穴住居跡4号② ・6号)	193
図版50 平安時代出土遺物4(土坑・包含層)	194

第Ⅰ章 東日本大震災後の対応

第1節 これまでの経緯(第1回)

平成23年3月11日の東日本大震災の発生を受け、文化庁は、発災後の平成23年4月28日付け(23府財第61号)で「東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて(通知)」により、宮城県を含む1都7県1市の教育委員会教育長に対し、被災地の復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の適切な保護との整合性を図るよう通知を行った。また、平成24年4月17日付け(24府財第62号)で同名の通知を発し、宮城・岩手・福島・仙台市の3県1市の教育委員会教育長に対し、迅速な埋蔵文化財の発掘調査を実施するための留意点を示した。

これらの通知を受け宮城県教育委員会は、県内市町村に対し、事業計画の早期把握による周知の埋蔵文化財包蔵地での開発事業の回避及び発掘調査に備えた埋蔵文化財包蔵地の早期の内容把握を求めるとともに、宮城県発掘調査基準の弾力的な運用、専門職員の確保や民間調査組織の導入を含めた調査体制の充実を図り、迅速な発掘調査に努め、設定した調査期間を厳守することなどの方針が示された。

気仙沼市教育委員会では、文化庁及び宮城県教育委員会の提示した方針に基づき宮城県教育委員会の協力を得ながら、迅速かつ適正な発掘調査を実施することとした。

※東日本大震災によって文化庁が発した埋蔵文化財関係の通知等

- ・東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて(通知)(平成23年4月28日付け23府財第61号)
 - ・東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて(通知)(平成24年4月17日付け24府財第62号)
 - ・東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する平成23年4月28日付け文化庁次長通知(23府財第61号)について(通知)(平成25年2月18日24府財第691号)
 - ・東日本大震災の復興に伴う防災集団移転促進事業における埋蔵文化財発掘調査の実施に関する取扱いについて(通知)(平成25年3月15日付け事務連絡)
 - ・東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する取扱いについて(回答)(平成25年3月15日付け事務連絡)
- ※東日本大震災によって宮城県教育委員会が発した埋蔵文化財関係の通知
- ・東日本大震災の復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて(通知)(平成23年6月3日文第268号)

第2節 調査体制

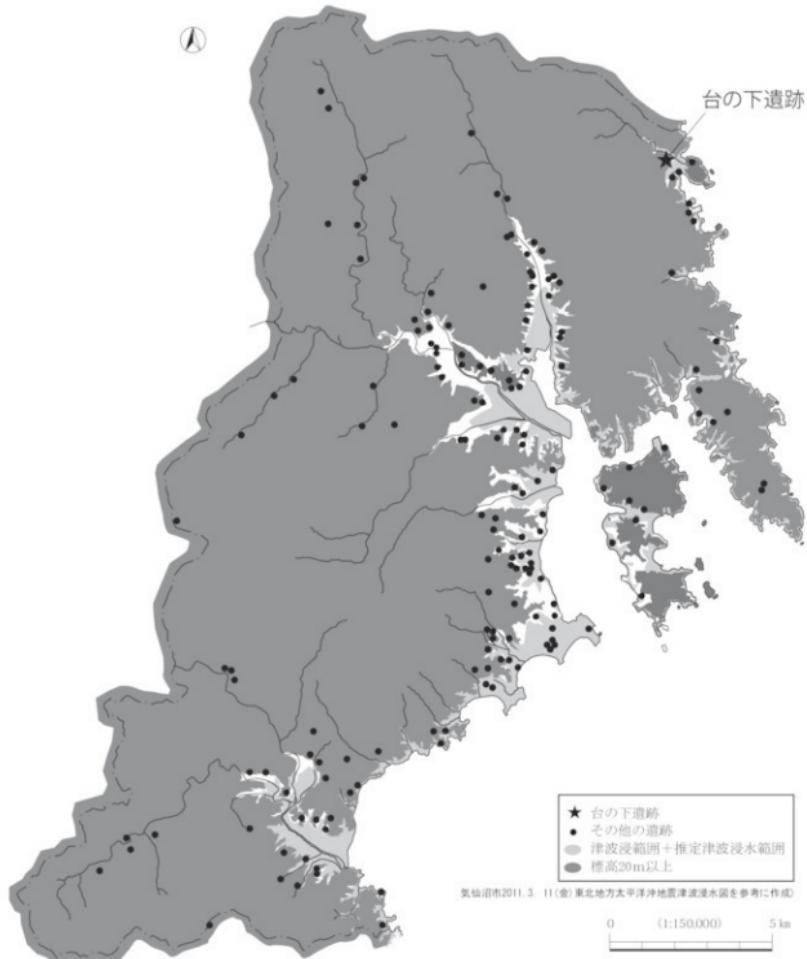
東日本大震災復興交付金事業の基幹事業に位置付けられた防災集団移転事業や土地区画整理事業等の大規模な事業については、分布・試掘調査を宮城県教育委員会が行い、確認調査及び本調査を気仙沼市教育委員会が行うこととした。同じく基幹事業に位置付けられている被災した個人住宅及び中小零細企業の店舗・工場等の再建に伴う発掘調査は、気仙沼市教育委員会が主体となり実施することとした。

気仙沼市教育委員会が主体となって行う調査については、調査内容・規模等必要に応じて随時宮城県教育委員会から専門職員の派遣を受けて実施することとした。

気仙沼市では、震災復興計画が策定される中で、集団移転事業など多くの開発事業が、周知の

埋蔵文化財包蔵地へ影響を及ぼす可能性が高くなることが予想され、震災以前の文化財保護体制では、発掘調査を行う専門職員の不足が見込まれた。

そこで、平成 24 年 4 月に専門職員 1 名を再任用するとともに、平成 25 年 1 月には鹿児島県教育委員会からの派遣職員 1 名と、宮城県が復興事業推進のため採用した任期付職員 2 名の派遣を受け発掘調査体制の強化を図った。また、平成 25 年 4 月及び平成 27 年 1 月に任期付職員各 1 名、平成 28 年 4 月には専門職員 1 名を採用した。併せて、発掘調査の規模や内容等を勘案し、



第 1 図 台の下遺跡位置図

宮城県教育委員会に専門職員の派遣を要請した。

各年度の調査体制及び宮城県教育庁文化財保護課の調査協力は以下のとおりである。(台の下遺跡関係分のみ)

調査担当 生涯学習課文化振興係

平成 24 年度

生涯学習課長 千葉光広 課長補佐 鈴木實夫 主幹兼文化振興係長 昆野賢一

平成 25 年度

生涯学習課長 千葉光広 課長補佐 鈴木實夫 主幹兼文化振興係長 昆野賢一

主幹 原田享二(任期付職員) 主査 西園勝彦(鹿児島県派遣) 技師 鹿島直樹(任期付職員)

平成 26 年度

生涯学習課長 菅原京子 課長補佐 鈴木實夫 主幹兼文化振興係長 昆野賢一

主幹 野崎進(山梨県笛吹市派遣) 主査 森幸一郎(鹿児島県派遣) 主幹 原田享二

技師 鹿島直樹

平成 27 年度

生涯学習課長 菅原京子 課長補佐 鈴木實夫 主幹兼文化振興係長 輛野寛治

主幹 野崎進 永瀬功治(鹿児島県派遣) 原田享二

平成 28 年度

生涯学習課長 畠山美雪 課長補佐 鈴木實夫 主幹兼文化振興係長 輛野寛治

主幹 平木場秀男(鹿児島県派遣)

平成 29 年度

生涯学習課長 畠山美雪 技術補佐 鈴木實夫 主幹兼文化振興係長 輛野寛治

主幹 平木場秀男(鹿児島県派遣)

調査協力 宮城県教育庁文化財保護課(五十音順、職名・敬称略、括弧内は派遣元等自治体)

平成 25 年度

加藤勝仁(神奈川県) 河村康宏(広島県) 佐々木好直(奈良県) 中村幸弘(熊本県)

伴瀬宗一(埼玉県) 吉本健一(佐賀県) 和田理啓(宮崎県)

大友邦彦 清水上政憲 傅田惠隆 西村 力 古田和誠(宮城県)

平成 26 年度

潮田憲幸(新潟市) 和田理啓(宮崎県) 大友邦彦 小山 朗 西村 力(宮城県)

平成 27 年度

和田理啓(宮崎県) 西村 力(宮城県)

平成 28 年度

米田克彦(岡山県) 西村 力 古田和誠 佐藤渉(宮城県)

平成 29 年度

古田和誠(宮城県)

第Ⅱ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過（第2図）

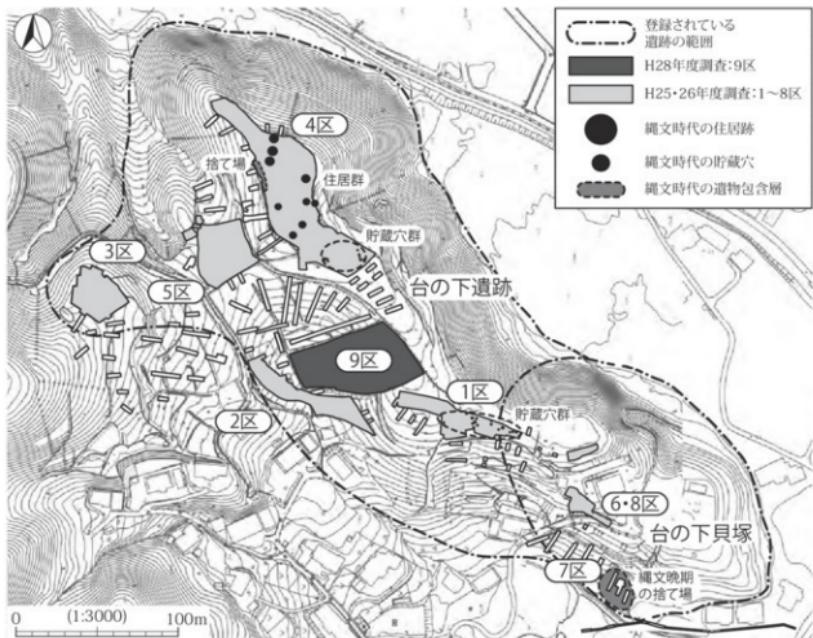
東日本大震災に伴う津波被害により、家屋が甚大な被害を受けた大沢地区では、高台への集団移転が必要になり、平成23年度に「今後の住まいに関する意向調査」が行われた。大沢地区においては、「大沢地区防災集団移転促進期成同盟会」が発足し、平成23年4月25日及び同年7月29日に要望書が気仙沼市に提出され、平成23年12月9日に集団移転52戸と災害公営住宅36戸の申し込みを行った。気仙沼市では、地元同盟会と協議を行い、既存集落から1km以内の距離で、候補地5ヶ所を選定し、大沢漁港の接近性、高台の平地の有効性を考慮し、さらに防災集団移転促進事業へ参画者の意向を踏まえ、候補地を2ヶ所に選定し、台の下地区を大沢A及び荒谷前地区を大沢Bとした。

大沢Aは台の下貝塚及び台の下遺跡、大沢Bが波怒廃館遺跡の範囲内に含まれていることから、平成24年2月14日に、防災集団移転候補地の現地踏査を、宮城県教育委員会、気仙沼市教育委員会、気仙沼市建設部用地課の三者によって行い、遺跡の範囲を大沢Aでは北に、大沢Bでは東に広げることとし、確認調査の必要性を認識した。3月18日に、大沢地区住民まちづくり集会において埋蔵文化財と確認調査の実施について説明を行った。4月19日付け気用第14号で「大沢地区防災集団移転促進事業と埋蔵文化財とかかわりについて」の協議書の進達依頼があり、宮城県教育委員会に進達し、5月1日地権者に対して確認調査についての説明会を行った。用地買収に先立ち、地権者の方々から発掘調査の承諾を得て、6月11日付気用第93号で埋蔵文化財発掘の通知が提出された。6月25日市担当課と発掘調査の打合せを行い、大沢B地区から調査を実施することを確認した。

9月27日大沢B地区の確認調査開始前に用地課、設計委託業者、県及び市教育委員会による立木伐採等の進捗状況、調査体制の確認を行う。大沢Bは、波怒廃館遺跡の範囲内にあたることから平成24年10月22日から確認調査を行い、引き続き本調査に移行し平成25年6月30日に終了した。

続いて、大沢Aの確認調査を平成25年7月1日～10月11日まで行い、遺構が確認された調査区においては、7月22日から本調査に移行した。台の下遺跡部分については、発掘調査区1～5・7区を設定し、1～5区を平成25年7月22日から平成26年1月24日まで、7区を平成25年8月2日～26日まで行い、12月14日に現地説明会を行った。台の下貝塚部分での電柱の移設に伴う立合の際に縄文時代の貝層が認められた。確認調査を行ったところ、計画地内に遺物包含層と貝層が延びることが判明したため、計画道路法面部分に6区、生活道路部分に8区を設定し、6区を1月27日～4月14日、8区の本調査を6月2日～7月24日の期間で引き続き実施し、終了した。

その後、漁業集落事業集会施設用地整備工事として大沢地区的集会所建設が計画されたことから、確認調査を平成27年12月1日～12月7日に実施した。その結果、遺物包含層や遺構が見つかったことから、調査区を9区に設定し、宮城県から専門職員の派遣協力をいただきながら本調査を平成28年7月25日から開始した。平成28年10月30日に現地説明会を開催し、平成28年11月11日に終了した。なお、「台の下館跡」の名称が「台の下遺跡」に変更されたことに



第2図 台の下遺跡の調査区及び主要遺構配置図

併し、確認調査時から「台の下遺跡」を遺跡名として使用した。

第2節 調査の組織

台の下遺跡9区の調査体制は、以下のとおりである。

<確認調査> (平成27年度)

事業主体 気仙沼市産業部水産基盤整備課

調査主体 気仙沼市教育委員会

調査統括 生涯学習課長 菅原 京子

調査企画 課長補佐 鈴木 實夫

主幹兼文化振興係長 幡野 寛治

調査担当 主幹 原田 享二(市任期付職員)

事務担当 主査 山本 克美(横浜市派遣)

調査協力 和田 理啓(宮城県・宮崎県派遣)

<本調査・整理作業> (平成28年度)

事業主体 気仙沼市産業部水産基盤整備課

調査主体 気仙沼市教育委員会

調査統括 生涯学習課長 岛山 美雪

調査企画課長補佐 鈴木 實夫
主幹兼文化振興係長 嶋野 寛治
調査担当主幹 平木場秀男(鹿児島県派遣)
事務担当主幹 新谷 優章(兵庫県派遣)
調査協力 米田 克彦(宮城県・岡山県派遣) 古田 和誠 佐藤 渉(宮城県)

<整理作業・報告書作成>(平成29年度)

事業主体 気仙沼市産業部水産基盤整備課

調査主体 気仙沼市教育委員会

調査統括生涯学習課長 岛山 美雪

調査企画主幹兼文化振興係長 嶋野 寛治

調査担当主幹 平木場秀男(鹿児島県派遣)

調査補助嘱託員 藤本 愛

事務担当主幹 目賀多 茂(兵庫県派遣)

第Ⅲ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境(第3図・第1表)

気仙沼市は、宮城県の北東端に位置し、西・北は岩手県一関市及び陸前高田市、南は宮城県本吉郡南三陸町に接しており、東には太平洋が広がっている。西側には、標高400～700m程の北上山地が南北に連なり、山地からの派生した丘陵がいくつも海岸近くまで延びている。山地を源流とする河川が太平洋に注いでいるが、大川、小泉川など市内で代表される河川は2級河川であり、河川による沖積地は河口付近に形成されているが、市域全体からするとわずかである。東側はリアス海岸が形成され、入り込んだ地形は、天然の良港を形成し、世界三大漁場の一つである三陸沖が目の前にあることから日本屈指の漁業のまちに発達している。

台の下遺跡の所在する気仙沼市唐桑町大沢地区は、気仙沼市の最北端に位置し、北側で岩手県陸前高田市と接している。標高745mの不動山から派生した丘陵が広田湾の近くまで延び、青野沢川や夜這路川などの小河川が湾に注いでいる。小河川の河口付近には小規模な沖積地が形成され、そこに町並みが造られていたが、今回の震災で、町並みはほとんど流失している。

台の下遺跡は、標高40mほどの丘陵上及び斜面に亘って展開しており、現況は畠地や山林及び宅地になっていたが、24～26年度の防災集団移転に伴って、周辺に近接して所在する波怒棄館(はぬきだて)遺跡、台の下貝塚を含めた一帯で、大規模な発掘調査が行われた。その際、台の下遺跡(1～5・7区)では、丘陵の北側で縄文時代中期終末の複式炉を伴う竪穴住居群、南側で2ヶ所の貯蔵穴群、西寄りで捨て場が、また、丘陵南側の裾野に広がる台の下貝塚(6・8区)では、縄文時代後期初頭の貝塚や縄文時代晚期の土坑墓群、捨て場などが見つかっている。今回の調査区(9区)は、遺跡の所在する丘陵地の中央南寄りにあたり、平成24・25年度に調査した4区(北側)、2区(西側)、1区(南側)に隣接する。

第2節 歴史的環境

気仙沼市内には181ヶ所の遺跡が所在しているが、その多くは海岸線に沿った段丘及び丘陵上

に点在し、縄文時代の貝塚及び散布地と中世の城館跡が多い。震災前は、開発による発掘調査が少なかったことから遺跡の概要を知ることが少なかったが、震災後防災集団移転など高台への移転が増加したことにより発掘調査が増加し、遺跡の概要が解明されつつある。

○縄文時代

市内には約 70 ケ所の遺跡が知られているが、そのうち前浜貝塚、南最知貝塚、内の脇 1 号貝塚、内の脇 2 号貝塚、磯草貝塚、田柄貝塚、藤ヶ浜貝塚などで調査が行われている。震災後、集団移転及び個人住宅建築等に係り杉の下貝塚、波怒棄館遺跡、磯草貝塚、南最知貝塚、高谷遺跡、緑館遺跡、裏方 A 貝塚・裏方 B 遺跡、古館貝塚等で調査が行われ貝塚、竪穴建物跡、貯蔵穴などの遺構が確認されている。

また、東は陸前高田市の広田半島、北は最奥部の気仙川河口、西及び南の唐桑半島に囲まれた広田湾には、縄文時代の多くの貝塚が所在している。とくに、陸前高田市では湾内に 12 ケ所の貝塚が確認されている。そのうち、二日市貝塚、中沢浜貝塚、瀬沢貝塚は明治・大正時代から全国的に知られ、中沢貝塚は昭和 9 年に国の史跡に指定されている。

台の下遺跡の周辺には、南側の丘陵上に波怒棄館遺跡(4)があり、大沢地区の集団移転事業に係り、平成 24・25 年度に調査が行われ、2 ケ所の貝塚が確認されたほか、縄文時代早期から晩期の縄文土器が出土し、とくに縄文時代前期後葉の貝塚からマグロの骨が大量に出土している。館地区には、晩期の土器が出土している岩井沢貝塚(7)、その南に隣接し載鉤遺跡(8)が所在している。只越地区には、晩期の土器が出土している只越(ムネホラ)遺跡がある。また、唐桑半島には、鮎立地区に藤ヶ浜貝塚があり、前期末・中期前半、晩期後葉、弥生時代の遺物が出土し、遺跡中央部で行われた昭和 56 年の調査で中期前半の土坑 3 基が確認されている。同地区には古館貝塚、長浜貝塚(鮎立遺跡)がある。古館貝塚からは前期から晩期までの土器が発見されており、平成 24 年個人住宅建築に係る調査で、中期の土坑 4 基が確認されている。

○弥生時代

市内には、弥生土器の出土した田柄貝塚、藤ヶ浜貝塚など 6 ケ所の遺跡が知られているが遺構は確認されていない。

隣接の陸前高田市においても、中沢浜貝塚で弥生時代前期の土器が出土しているが、中沢浜を含め 4 遺跡で少量の弥生土器が出土している程度である。

○古墳時代

本吉町大谷地区に三島古墳群があり、現在 8 基の埴丘が確認されるが、21 基があったと言われている。明治末、古墳のある崖下の宅地造成工事で勾玉(瑪瑙・碧玉等)17 個、切子玉 5 個、管玉 2 個、小玉 26 個、計 50 個が出土し、現在東京国立博物館に保管されている。平成 25 年に個人住宅建築に係る確認調査で、新たに 1 基の周溝を確認している。南最知貝塚では昭和 53 年の調査で古墳時代末葉の竪穴建物跡が確認されている。

○古代

新月地区に塙沢横穴墓群が八瀬川を挟み東側と西側に 10 数基確認されている。昭和 50 年に東側の A 地区古墳群で 7 基の発掘調査が行われ、人骨 1 体と土師器、須恵器、刀装具、鐵鑓等の副葬品が出土し、8~9 世紀に造営したものと報告されている。また、南三陸町歌津と本吉町にまたがって田東山に経塚群が所在し、昭和 46 年に発掘調査が行われ、平安時代の銅製経筒、常滑

産三筋壙が出土している。

震災後の発掘調査で、星谷遺跡、緑館遺跡、南最知貝塚、杉の下南遺跡で古墳時代後期から平安時代の竪穴建物跡が確認されている。

○中世

市内には、80ヶ所を超す中世城館跡が所在しており、縄文時代の遺跡と同じくらい多い。しかし、これまで猿喰東館跡と陣山館跡で調査が行われている程度である。

台の下遺跡の周辺には、朝日館跡(5)、出山館跡(3)、波怒棄館遺跡(4)、八幡館跡(6)が海沿いの海岸段丘及び丘陵部に所在している。朝日館跡は、台の下貝塚(2)より南側、国道45号線の南側の丘陵上に所在しており、竹の袖小原家及び台の下小野寺家所蔵文書によると、葛西領内動乱の最中、天正元年(1573)唐桑北館の城主安部四郎左衛門頼為の軍が小原本朝日館を攻撃し、小原本城主星小次郎弾正忠信が討死し落城した。その遺子千代丸が、7年後星右京進忠元と改名し、氣仙浜田の城主千葉安房広綱の三男千葉三郎綱盛の加勢を得て、安部四郎左衛門頼為を打ち滅ぼしたと記載されている。八幡館跡は、館地区に所在しているが、「仙台領古城書上」には千葉藤左衛門の居城である。1590年、葛西晴信が豊臣秀吉に敗れ、当方は400年も続いた葛西氏の統治が終わり、伊達氏の管轄地になる。

○近世以降

氣仙沼は、仙台藩の領地になり、本吉郡北方20ヶ所に分けられ統治された。大沢地区は、小原本村になる。江戸時代の大沢地区の交通網は、海岸沿いの道より、初期に整備された氣仙道(東浜街道)が鹿折村の善茶屋から綱木峠を越えて青野沢川沿いの沢内茶屋、その北の松の坂を越えて長部、今泉につづくルートが主流であった。いまでも善茶屋や沢内茶屋付近の街道脇に一里塚が確認できる。

明治時代になり、当地区は、桃生県、登米県、一関県、水沢県と毎年所属する県が変わるが、明治8年の磐井県の管轄になり、明治9年に小原本村が設置され、宮城県に編入された。さらに明治22年の町村施行に伴い唐桑村になり、昭和30年町政施行し唐桑町に、平成18年に氣仙沼市と合併し氣仙沼市になり、現在に至っている。

引用・参考文献

- 荒木英夫・氣仙沼郷土研究会 1964 氣仙沼の地質
唐 桑 町 1968 唐桑町史
氣仙沼市教育委員会 1976 宮城県氣仙沼市文化財調査報告書 塚沢横穴古墳群
宮城県教育委員会 1979 宮城県文化財調査報告書第57集 宮城県文化財発掘調査略報 南最知遺跡
氣仙沼市教育委員会 1980 宮城県氣仙沼市文化財調査報告書第2集 南最知遺跡発掘調査概報
宮城県教育委員会 1981 宮城県文化財調査報告書第76集 東北地建バイパス関係遺跡調査報告書 赤岩館経塚
氣仙沼市教育委員会 1982 宮城県氣仙沼市文化財調査報告書第3集 塚沢横穴古墳群B地区発掘調査報告書
氣仙沼市教育委員会 1982 宮城県氣仙沼市文化財調査報告書第4集 内の脇2号貝塚発掘調査概報
氣仙沼市教育委員会 1982 宮城県氣仙沼市文化財調査報告書第4集 一般県道大鳥線改良工事に伴う駒形遺跡発掘調査報告書
本 吉 町 1982 本吉町誌
宮城県教育委員会 1982 宮城県文化財調査報告書第90集 宮城県文化財発掘調査略報 藤浜貝塚
氣 仙 沼 市 1988 氣仙沼市史Ⅱ先史・古代・中世編
東 北 歴 史 資 料 館 1989 東北歴史資料館資料集第25 宮城県の貝塚
氣 仙 沼 市 1998 氣仙沼市史補遺編 考古・古文書等資料



第3図 台の下遺跡 周辺遺跡図

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡名	所在地	地形	種別	時代	遺構・遺物	備考
台の下遺跡 (本報告書)	唐桑町 台の下	丘陵	集落跡	縄文・平安	掘立柱建物跡、土坑、堅穴住居群、鍛冶炉	H24～28年度調査
出山館跡	唐桑町 出山	丘陵	城館	中世		
朝日館跡	唐桑町 荒谷前	丘陵麓	城館	中世		
波忍館跡遺跡	唐桑町 荒谷前	丘陵麓	散布地	縄文	縄文土器、石器	H24・25年度調査
八幡館跡	唐桑町 岩井沢	丘陵麓	城館	中世		
岩井沢貝塚	唐桑町 岩井沢	丘陵斜面	貝塚	縄文	縄文土器、石器	H26年度調査
載鉤遺跡	唐桑町 載鉤	丘陵斜面	散布地	縄文	縄文土器、石器	H24年度調査

第IV章 調査の概要と層序

第1節 確認調査(第4図・第2表)

台の下遺跡9区の確認調査は、平成27年12月1日～平成27年12月7日、調査対象面積2,500m²に対して702m²について確認調査を行った。(面積比率約28%)

平成27年11月4日に水産基盤整備課と教育委員会で現地協議を行い、前回の発掘調査範囲外にあたることから、伐採、除草作業終了後、確認調査を実施することとなった。

確認調査では調査対象区を3つのエリアに分け、東側の丘陵地尾根部分にあたる上段部、そこから南西方向へ向かって下る斜面を中段部、斜面下のほぼ平坦部を下段部とし、計13ヶ所にそれぞれトレンドを設定し調査を行った。調査は設定したトレンド部分の表土～遺物包含層までを重機で除去し、人力で遺物包含層の掘り下げを行った。

その結果、ほとんどのトレンドから遺物が出土し、遺構も確認された。上段部には略東西方向に6ヶ所、3m×12～18mのトレンドをほぼ等間隔に設定し調査した。表土は20～50cm程度と薄く、表土直下は硬い岩盤であった。岩盤を割り抜くようにして土坑やピットが多数確認された。出土遺物の様子から縄文時代のものと思われるが、検出のみのため時期不明である。

中段部には、急勾配の斜面がやや緩やかになる部分を中心に、略東西方向に4ヶ所、3m×12～18mのトレンドをほぼ等間隔に設定し調査した。表土下から遺構検出までの包含層には遺物が混在しており、場所により異なるが、下段へ向かうほど厚く堆積していた。8T、9Tでは、トレンド西隅から堅穴住居跡らしき遺構が確認されたことから、トレンド西側の延長や新たなトレンドを設定するなどして確認を行った。南側の10Tからは、大量の縄文土器や石器が出土した。これらの結果から、少なくとも2棟以上の堅穴建物跡が存在し、その他に土坑やピット、溝状遺構、大量の遺物を含んだ包含層なども見つかった。遺物はほとんどが縄文時代のものであるが、平安時代のものも含まれ混在して出土した。

下段部は略南北方向に3m×18～20mのトレンドを設定し調査を行った。その結果、北側から南方向へ包含層が厚く堆積していたが、遺物量は少なく、遺構もピット数基のほかはほとんど

確認されなかった。

これらの結果から、調査区上段と中段の緩斜面に遺構の集中が見られ、全体に広がっていると推測された。また、遺物も縄文時代の遺物が調査区全体から出土し、部分的に平安時代のものも含まれることから、少なくとも二つの時期が存在する複合遺跡であることが判明したので、次年度本調査を実施することとなった。

第2節 本調査

台の下遺跡9区の調査は、本調査を平成28年7月25日～平成28年11月11日の間、調査面積2,500m²を対象に行った。

調査対象区周辺は、平成27年度の確認調査時に行った伐採から1年が経過していたため雑草に覆われ、加えて伐採時の雑木や倉庫の廃材などの産廃も残存していた。そこで、調査開始にあたって、調査区及び周辺の産廃除去・除草を行い、境界杭を打ち直して調査範囲を明確にした。その後、集会所建設用工事杭の中から、最南西隅に位置する杭（点名：H05唐04340245）を基準点とする10m間隔でグリッドを設定し、西側へ20mの位置から東側に向かって1、2、3・・・、北側50mの位置から南側に向かってA、B、C・・・としたグリッドを基本とし調査を行った。

土層観察については、観察用ベルトは設定せず、調査区南側壁全体を実測し土層観察とした。

調査は、調査区内へ出入りする重機の進入路を北端に沿って確保し、中段に急斜面を有する調査区の状況から、最も効率的な表土剥ぎ及び発掘調査が同時進行できるように、上段→下段→中段→進入路の順に重機を用いて表土剥ぎを行った。その後、確認調査の結果に基づき、表土～遺物包含層及び遺構検出面まで重機で除去し、人力で遺物包含層・遺構検出の掘り下げを行った。

検出遺構は、必要に応じて精査し、GPSによる基準点測量とし、自動追尾トータルステーションと（株）CUBIC製の測量専用ソフト「電子平板遺構くん」を使用して平面測量を行った。

出土遺物については、10mグリッド一括または遺構名ごとに光波等を用いて出土位置等の記録保存を行った上で取り上げた。取り上げを行った後に掘り下げを続け、検出した遺構については、移植ごと等の遺構に適した道具を用いて慎重に半裁し、手実測による記録保存を行った。写真撮影は、調査員が必要に応じてデジタルカメラで撮影した。

調査終了後、調査区南側の市道について、人や車の往来が予想されるため、立ち入り禁止の柵を設置し安全対策を行った。

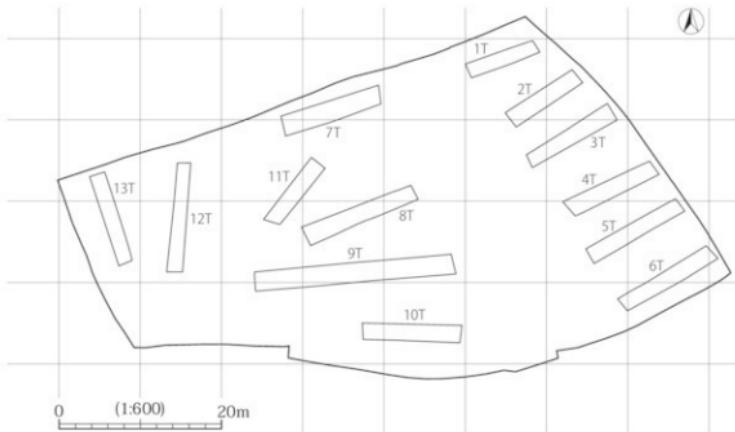
調査の詳細については、調査日誌により週単位で以下に記す。

【7月25～29日】

現場開始に向けての準備（調査範囲確認、現場内の危険箇所点検、駐車場整備、遺跡案内板設置、水道引き込み、近隣住民への周知活動、発掘機材の準備等）。プレハブ設置作業（事務所・倉庫・トイレ・電気）。上段部の重機による表土剥ぎ。

【8月1～5日】

環境整備（産廃搬出、周辺除草、上段への階段設置、発掘機材の運搬等）。上段部の調査（B・C-7～9区掘り下げ、遺構検出、写真撮影、平面図作成。重機による下段部の表土剥ぎ及びダンプによる排土搬出。グリッド杭打ち）。



第4図 台の下遺跡9区 確認トレンチ配置図

第2表 台の下遺跡9区 確認トレンチ調査結果

トレンチ名	調査区	規格	面積	遺物	道構	備考
1T	上段	3m × 12m	36m ²	○	○	
2T	上段	3m × 14m	42m ²	○	○	土坑、ピット
3T	上段	3m × 16m	48m ²	○	○	土坑、ピット
4T	上段	3m × 16m	48m ²	○	○	土坑、ピット
5T	上段	3m × 18m	54m ²	○	○	土坑、ピット
6T	上段	3m × 18m	54m ²	○	○	土坑、ピット
7T	中段	3m × 18m	54m ²	○	○	ピット
8T	中段	3m × 20m	60m ²	○	○	土坑、ピット、豊穴住居跡
9T	中段	3m × 34m	102m ²	○	○	土坑、ピット、豊穴住居跡、溝状造構
10T	中段	3m × 17m	51m ²	○	○	土坑、ピット、遺物集中
11T	中段	3m × 13m	39m ²	○	○	ピット
12T	下段	3m × 20m	60m ²	○	○	ピット
13T	下段	3m × 18m	54m ²	○	○	ピット

【8月8～10日】

上段部の調査(B・C-7～9区) 遺構掘り下げ、写真撮影、平面図作成、遺物取り上げ。土坑1、2号検出。D・E-7～9区 挖り下げ、遺構検出。重機による下段部の表土剥ぎ及びダンプによる排土搬出。グリッド杭打ち。長期休み前の養生(シート掛け、安全対策等)

【8月11～16日】

お盆休みのため作業中止。

【8月17～19日】

上段部の調査(C～E-8・9区) 挖り下げ、遺構検出。重機による下段部の表土剥ぎ。宮城県文化財保護課現場視察(8/19)。現場養生(台風接近)。

【8月22～26日】

上段部の調査(A～C-7～9区) 遺構掘り下げ、写真撮影、平面図作成、遺物取り上げ。(D・E-8・9区) 挖り下げ、遺構検出、遺物取り上げ。重機による排土搬出。

水産基盤整備課発掘現場視察(8/23)。現場養生(台風接近)。

【8月29～9月2日】

上段部の調査(C～E-8・9区) 遺構掘り下げ、実測、写真撮影、遺物取り上げ。中段部の重機による表土剥ぎ。現場養生(台風接近)。見学者1名。

【9月5～9日】

上段部の調査(C～E-8・9区) 遺構掘り下げ、実測、写真撮影。中段部の調査(E-5～7区) 挖り下げ、遺構検出。下段部の調査(E-3・4区) 挖り下げ、遺構検出、土層断面の精査。中段部の重機による表土剥ぎ。作業員2名増員。岡山県古代吉備文化財センター所長視察(9/6)。

【9月12～16日】

上段部の調査(C～E-8・9区) 遺構掘り下げ、実測、写真撮影。中段部の調査(D・E-4～6区) 挖り下げ、遺構検出。下段部の調査(E-3・4区) 挖り下げ、遺構検出、地形図作成。中段部の重機による表土剥ぎ。

【9月26～30日】

上段部の調査(C～E-8・9区) 遺構掘り下げ、実測、写真撮影。中段部の調査(D・E-5・6区) 遺構掘り下げ、遺物取り上げ、写真撮影。重機による表土剥ぎ。

【10月3～7日】

上段部(E-6～9区) の土層断面実測。中段部の調査(D・E-5・6区) 遺構掘り下げ遺物取り上げ。拡張部の重機による表土剥ぎ(E・F-4～8区)。重機による排土搬出。台風養生、台風接近による作業中止。

【10月11～13日】

上段部(E・F-7・8区) の掘り下げ、実測。中段部の調査(D・E-5・6区) 遺構掘り下げ、遺物取り上げ、実測。下段部(E・F-4～6区) の土層断面実測。

【10月17～21日】

中段部の調査(D・E-5～7区) 遺構掘り下げ、遺物取り上げ、実測、写真撮影。拡張部の重機による表土剥ぎ(E・F-4～8区)。下段部(E・F-4～6区) の土層断面実測。重機

による排土搬出。

【10月 24～28日】

上段部の遺構検出状況写真撮影。中段部の調査(D・E-5～7区) 遺構掘り下げ、遺物取り上げ、実測、写真撮影。現地説明会準備(見学ルート整備、看板・パネル等設置、駐車場整備、危険箇所点検等)。宮城県文化財保護課長視察(10/26)。鹿児島県立埋蔵文化財センター所長視察(10/27)。空中写真撮影(10/28)

【10月 30日】

現地説明会。見学者数150名。(8:30～12:00 会場準備、13:00 受付、14:00～15:30 見学会、17:00 解散)

【11月 1～4日】

中段部の調査(D・E-5～7区) 遺構掘り下げ、遺物取り上げ、実測、写真撮影。

【11月 7～11日】

中段部の調査(D・E-5～7区) 遺構掘り下げ、遺物取り上げ、実測、写真撮影。現場撤収作業(遺物移動、荷出し、片付け、重機による危険箇所一部埋め戻し、安全対策)。現場終了。

第3節 整理作業・報告書作成

台の下遺跡9区の整理作業は、本調査終了後の平成28年11月から宮城県教育委員会文化財保護課の協力を得ながら開始し、図面整理、遺物の洗浄、土器の注記、接合を実施し終了した。

引き続き平成29年度は、7月までに遺構の図面整理、土器・石器の抽出作業を終了した。また、出土した炭化物の年代測定・樹種同定を「パリノ・サーヴェイ(株)」に、出土した鍛冶関連遺物の金属学的科学分析を「日鉄住金テクノロジー(株)」にそれぞれ委託した。

8月からは遺構のトレース、遺物の実測、拓本、トレース、レイアウト、写真撮影などの報告書作成業務を「国際文化財株式会社」に委託した。なお一部の遺物については、実測、拓本、トレース、写真撮影作業を気仙沼市で行った。

その後、協力して原稿執筆、校正等を行い、平成30年3月に報告書を刊行した。

第4節 層序(第5図)

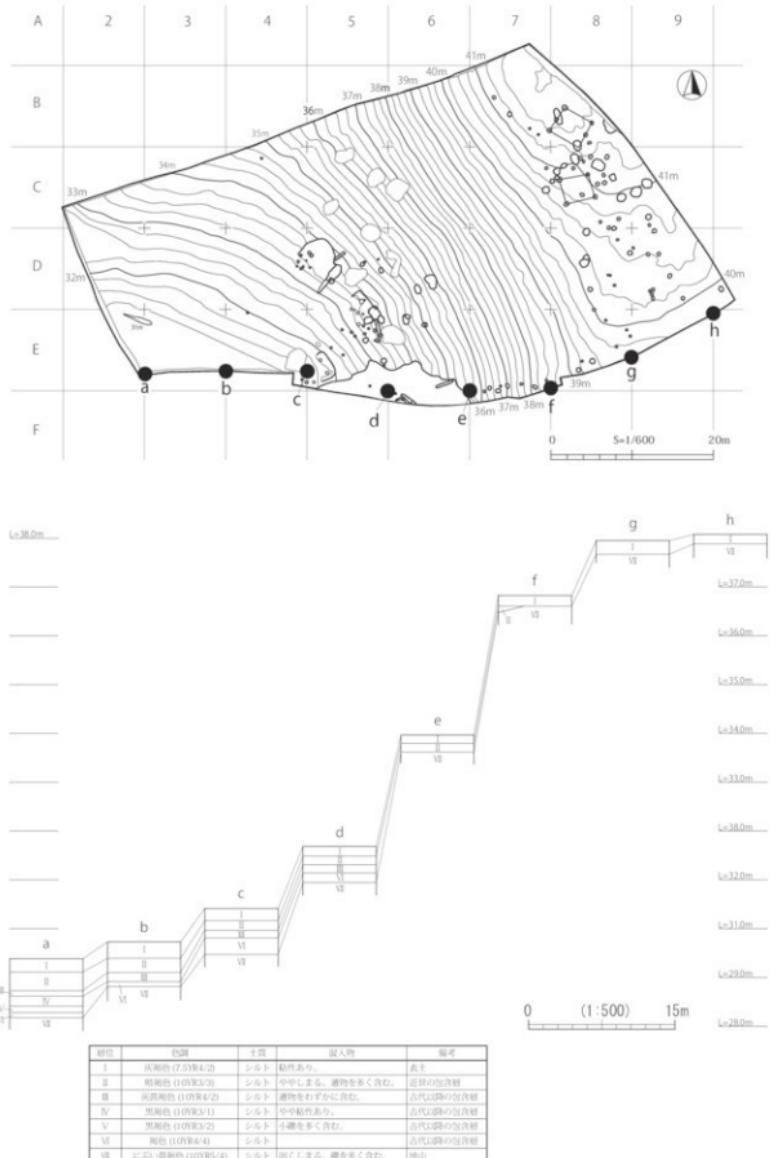
本遺跡の調査部分は、調査区西側の尾根部から略南東方向へ下っていく丘陵地形であり、頂上部に一部果樹園造成による削平が認められるが、全体として自然地形が良好に残存していた。しかし、全体的に下っていく地形であるため、尾根部は上位の層が無く表土下は硬い岩盤層であった。また、下位に向かう急斜面では、上位から流された土砂が岩盤層を覆うように堆積し、やや緩やかな斜面では厚く堆積していることが確認された。このような堆積状況から、斜面を下位へ下るほど層位が多くなり厚くなることから、大雨や台風などの自然現象により、急斜面の表面が削平され大量の土砂が下位へ流れ落ち、緩斜面で滞留して堆積することを繰り返した痕跡であると推測される。

土層中に多く含まれる遺物は、包含層の中での高低差があり、時代の異なる遺物も多く混在している。このことから、上方で自然堆積したものが流されて原位置で出土した可能性が高く、遺

構内遺物の多くは床着遺物を除き堆積土と共に流れ込んできたと推測される。

各地点の層序は以下のとおりである。

- I層(表土)・・ 粘性のある灰褐色土。砂質が強く小礫を含む。上段10cm前後～下段約20cmと調査区全体に安定して堆積している。
- II層・・・・ ややしまりのある暗褐色土。上段では削平により見られないが、急斜面の中頃(E-7区付近)から堆積が見られ、下段方向へ向かって厚く堆積し最大で50cm近い場所も確認される。遺物を多く含み陶磁器類の小破片も若干含まれる。
- III層・・・・ やや粘性のある灰黄褐色土。上段では削平により見られないが、急斜面の終わり頃(F-6区付近)から堆積が見られ、下段方向へ向かって20～30cmの厚さで安定して堆積している。小礫が混在し遺物が少し含まれる。
- IV層・・・・ やや粘性のある黒褐色土。下段のみ(E-3区付近)で堆積が見られ、15～20cmの厚さで堆積している。小礫を多く含み遺物がわずかに含まれる。
- V層・・・・ やや粘性のある黒褐色土。E-2・3区付近で堆積が見られ、約20cmの厚さで堆積している。破碎した細かい礫が混在し遺物がわずかに含まれる。
- VI層・・・・ しまりのある褐色土。上段では削平により見られないが、緩斜面へ変わる(F-5区付近)から堆積が見られ、下段方向へ向かって15～30cmの厚さで安定して堆積している。遺構検出面であり、埋土中に遺物は含まれない。
- VII層(地山)・・ 硬くしまったにぶい黄褐色土。礫を多く含む。



第5図 台の下遺跡9区 土層断面柱状模式図

第V章 発掘調査の成果

台の下遺跡の立地する台地は、台地の尾根部が北西方向から南東方向へ細長く延びる地形であり、北東方向は急激に下る切り立った崖状を呈し、南西方向は尾根から下る斜面地形である。台の下遺跡9区は、尾根部から谷方向へ向かって緩やかに下り始める場所に当たり、果樹園整備のため一部削平された部分を除き（B～E-8・9区）自然地形が良好に残存していた。

遺物包含層は、上段で地表から10～20cm、下段で30cm前後下位に広がっており、尾根部は薄く、西側の緩斜面は西へ進むにつれて厚みを増し斜面を埋めるように厚く堆積していた。

標高の高いB～E-8・9区周辺は表土直下に地山層があり、出土遺物量は少なかったが、上位を削平された遺構下部が残されていた。西側の斜面に沿って下っていくに従い包含層が厚く堆積し、遺物が出土し続けるという状態であった。出土遺物のレベル差も大きく、摩耗痕も見られることから、ほとんどの遺物が上位から流されて堆積したものと考えられる。傾斜がやや緩やかになり緩斜面へと変わる中段部に沿って遺構が点在していた。南西方向への緩斜面（C～E-2～4区）では、遺物の出土量も少なく遺構はほとんど確認されなかった。

出土した遺物の総点数は、小破片も含めて12,776点である。

第1節 繩文時代の調査成果

1 調査の概要（第6～57図）

縄文時代の調査は、尾根の西端にあたる標高約40mの本遺跡の上段部（A～E-8・9区）を中心に行った。地表直下に地山となる岩盤があり、南東方向へ向かって僅かに下る平坦面が広がっていた。この平坦面において、岩盤を人為的に剝り抜くようにして作られた円形または楕円形を呈した土坑・ピットが多数検出された。遺構内から縄文時代の遺物が多数出土したことから、縄文時代の土坑・ピットと思われる。周辺が削平された影響で、全体が削平され消失したものや実際に掘り込み面が上位にあったと推測される。その他では、西側の急斜面では確認されず、やや緩やかになる中段部で土坑が數基検出された。遺物は、上段部での出土量は少なかったが、ほぼ遺跡全体から出土した。出土量に違いはあるが、II～V層の全てで確認され、平安時代の遺構内からも出土していることから、傾斜により移動したと思われる。遺跡南端には縄文土器が大量に廃棄されていたエリア（E・F-5・6区）が、東西約20m、南北約5mに渡って検出された。出土状況から南側の谷へ向かって調査区外へ広がっていると推測される。

2 遺構（第6～57図）

縄文時代の遺構は、掘立柱建物跡2軒、埋設土器1基、土坑32基、ピット40基、捨て場1ヶ所、溝1条である。上段部の遺構（掘立柱建物跡、埋設土器、土坑、ピット）はV層（地山）、中段部の遺構（土坑、ピット、捨て場、溝）はVI層検出である。なお、捨て場は人為的に棄てられた遺物の集積エリアであると判断し、縄文時代の遺構扱いとした。

遺構内からは多くの遺物が出土しており、流れ込みと思われるものも含めた縄文時代の遺構内遺物の総数は、土器5,555点、石器1,599点、計7,154点である。



圖6 圖書文獻代

掘立柱建物跡（第7～9図、第3・4表）

縄文時代の掘立柱建物跡と考えられるものは、本遺跡の東側上段に2棟隣り合って検出された。2棟とも表土下の岩盤を掘り込んで柱穴が作られていた。上段の平坦面の中でもやや小高い部分に建っており、西側の斜面を見下ろす立地となっている。掘立柱建物跡の周辺には直径が1.5m前後の大型の土坑が取り巻くように集中しており、大量の遺物を伴うものも含まれることから、ほぼ同時期に成立していた可能性も想定される。その他にも多数の柱穴と思われるピットが検出されているが、削平による消失も考えられるため調査段階では確定することができなかった。

掘立柱建物跡1号（第7・8図、第3表）

B-7・8区のわずかに南側へ傾斜する平坦面で検出された。建物の規模は1間×2間で、柱穴が後に消失していると思われるものを含めて6基のピットからなり、主軸は略東西方向である。桁行は約3.4mであり、梁行は約4.1m、柱間寸法は1.73mとほぼ等間隔である。床面積はおよそ13.9m²で長方形の建物である。ピットは円形または楕円形を呈し、柱穴の消失したP6を除き、平均して54×48cm、深さ44cmとほぼ同規模であり、断面形はバケツ型である。埋土はV層の小ブロックを含む褐色または黄褐色である。

掘立柱建物跡1号の計測値は、第3表に示した。

遺物は、埋土中より合計で土器13点、石器3点の計16点出土している。土器は縄文時代後期のものと思われるが、小破片が多く図化できなかった。石器3点については図化した。1はP3より出土した砂岩製の磨石であり、被熱による割れが見られる。2はP5より出土した砂岩製の石錘で、両側面中位が敲打により抉れている。3はP6より出土した凹石である。石材は砂岩製で、表裏両面に不規則な凹みを持つ。

掘立柱建物跡2号（第9図、第4表）

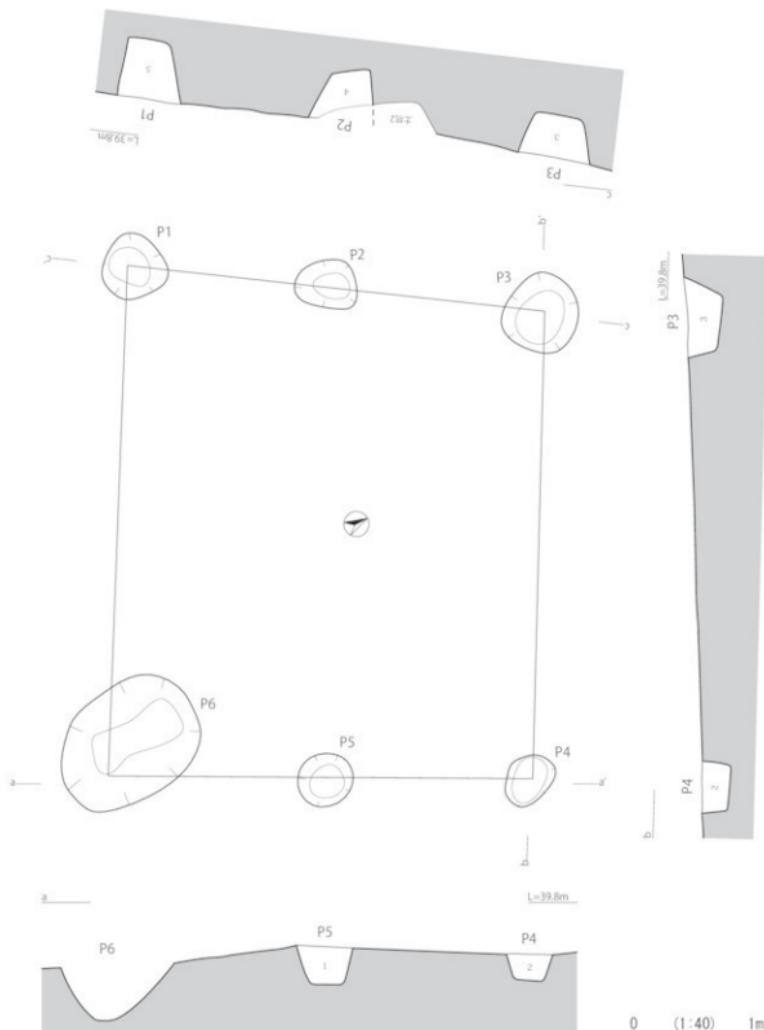
掘立柱建物跡1号から南方方向へ約5m離れた平坦面で検出された。建物の規模は1間×1間で、4基のピットからなる。主軸は略東西方向であり、桁行は約3.6m、梁行は約3.1m、床面積はおよそ11.2m²のほぼ正方形を呈した建物である。ピットは、ほぼ円形を呈し、平均して54×48cmと掘立柱建物跡1号とほぼ同じである。ピットの深さは、P1～3が約50cmであるのに対しても、P4のみ28cmと浅くなっている。しかし、底面高が約38.4m程度とほぼ同じであることから、P4方向へ下る検出面の傾斜のためと考えられる。埋土はV層の小ブロックを含む灰黄褐色である。

掘立柱建物跡2号の計測値は、第4表に示した。

遺物は、埋土中より合計で土器2点、石器3点の計5点出土している。土器は小破片が多く図化できなかった。石器は2点について図化した。4はP1より出土した凝灰岩製の棒状石製品で、長さ5.8cmと小型のものである。5はP2より出土した砂岩製の磨石である。下半分が欠損している。

埋設土器（第10図）

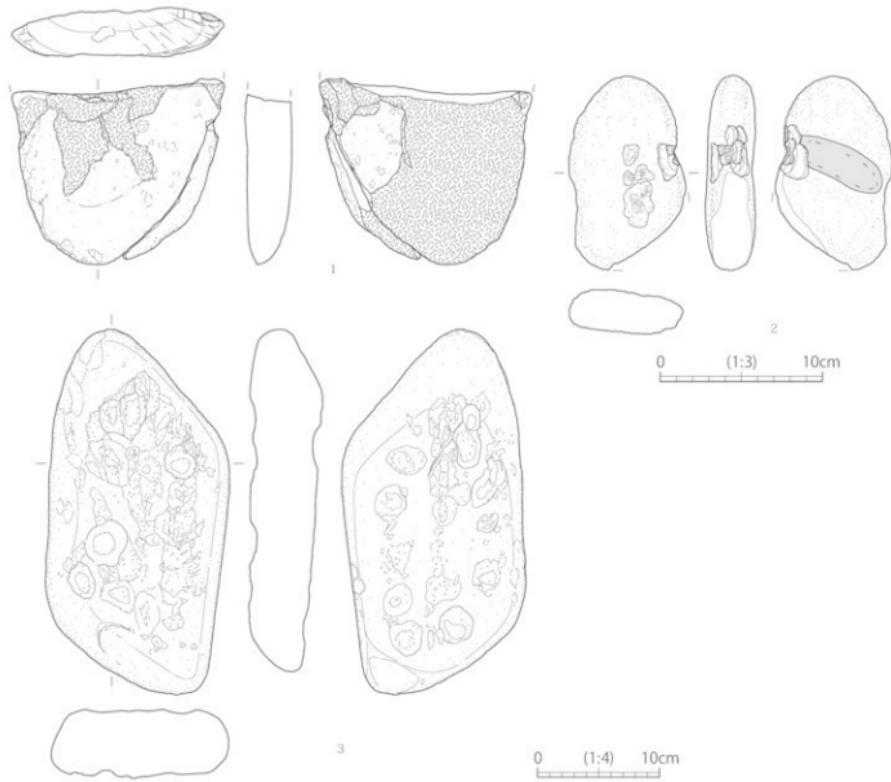
上段部の平坦面が南側へ緩やかに下るD-9区で検出された。表土下の地山であるV層をほぼ円形に掘り込むようにして作られた土坑に、縄文土器の深鉢が底面を西側に口縁部を東側に向け押しつぶされた状態でほぼ1個体分出土した。埋土とV層がほぼ同じ、にぶい黄褐色土をしており、



- | | | |
|---------------------|--------|------------------|
| 1. 黄褐色地 (10YR4/2) | シルト | |
| 2. 褐色 (7YR4/4) | 粘土質シルト | 埴輪ブロック上に焼物を多量含む。 |
| 3. 黑褐色 (7.5YR3/2) | シルト | |
| 4. にじく褐色 (7.5YR3/3) | シルト | 焼物を多量含む。 |
| 5. にじく褐色の砂質土質 | シルト | 埴輪ブロックを多量含む。 |

第7図 繩文時代 掘立柱建物跡1号

掘り込みの規模の確定は困難であったが、平面が 33×23 cm、検出面からの深さ約8cmのほぼ円形を呈し、土器本体の大きさに合わせて掘られたものと推測されるので、掘り込み面はさらに上位であると思われる。6は平底の底部から斜め上方に立ち上がり、口縁部付近でやや内向し口縁端部が若干開く器形の深鉢である。口縁部には4条の沈線文が巡り、端部は尖り気味である。器面の摩滅が著しく器体全体が大きく歪んでいる。内部にはVII層の小ブロックを含む粘土質の暗褐色土が埋土として見られたが、遺物や炭化物等の出土は確認されなかった。

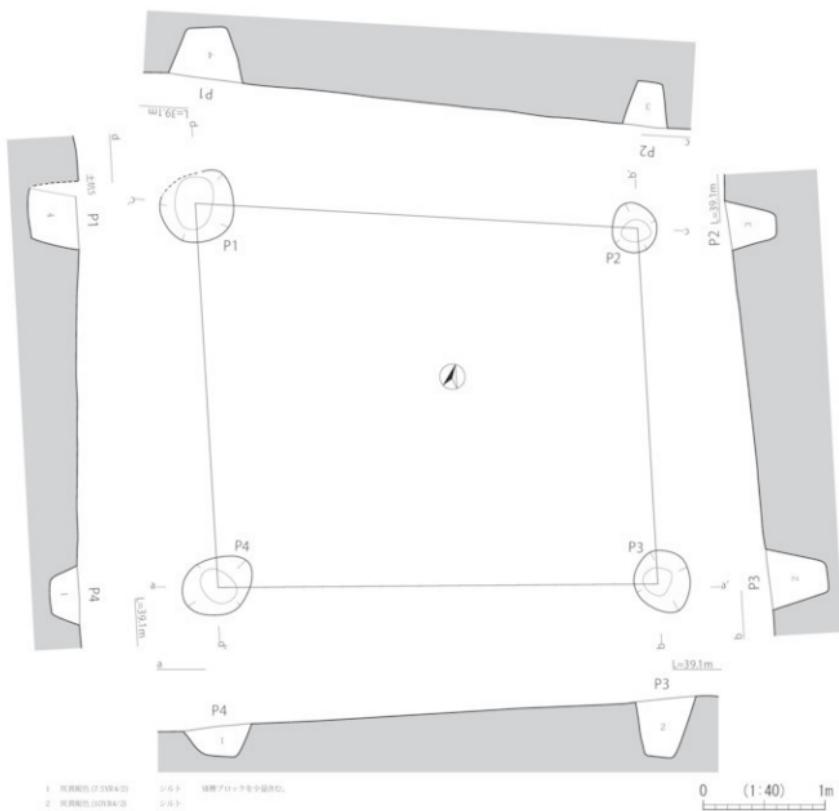


第8図 繩文時代 掘立柱建物跡1号 出土遺物

第3表 掘立柱建物跡1号 計測表

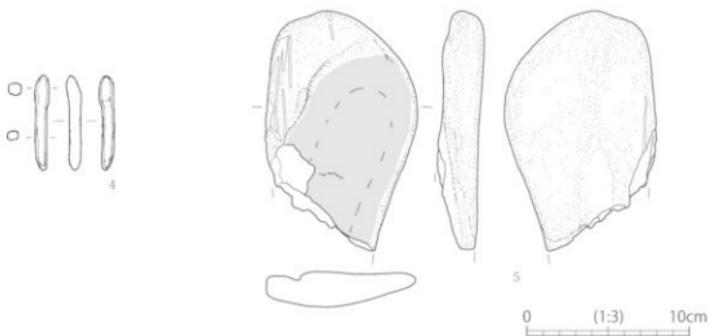
主軸方向	幅(cm)	奥行(cm)	高さ(cm)
東西 N 60° W	P1-P3 3.44	P1-P6 4.20	P1-P2 1.72
	P6-P4 3.48	P2-P5 4.08	P2-P3 1.72
	P6-P5 1.80		P5-P4 1.68
	P3-P4 3.84		

ピットNo	P1	P2	P3
長径(cm)	54	52	66
短径(cm)	54	40	64
深さ(cm)	56	43	39
ピットNo	P4	P5	P6
長径(cm)	48	48	124
短径(cm)	40	42	92
深さ(cm)	22	36	53



1. 灰陶器 (J.5194.05)
 2. 灰陶器 (J.5194.06)
 3. 灰陶器 (J.5194.07)
 4. 灰陶器 (J.5194.08)
- ルート
 ルート
 ルート
 ルート
- 火鉢
 灰陶ブロックを少量化
 灰陶物を含む、灰陶ブロックを少量化

0 (1:40) 1m

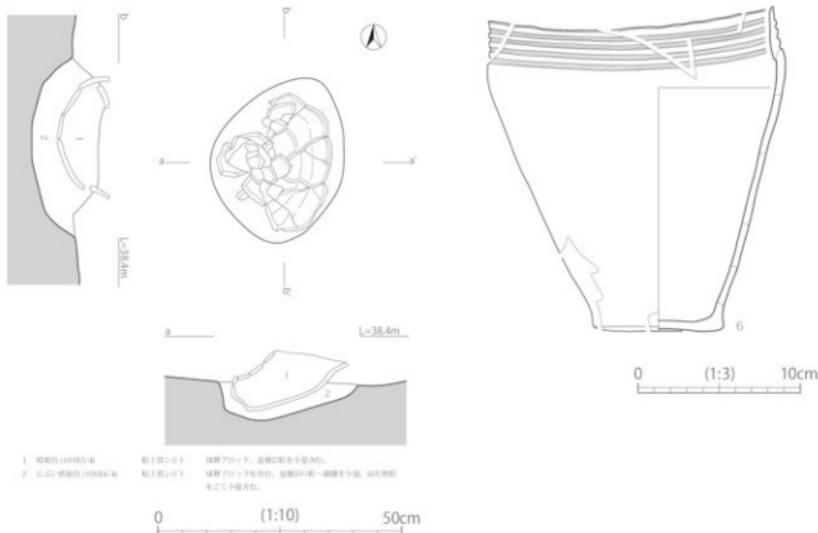


第9図 縄文時代 掘立柱建物跡 2号

第4表 掘立柱建物跡2号 計測表

主軸方向	桁行(m)	梁行(m)
東西	P1-P2 3.64	P1-P4 3.20
N-80° E	P4-P3 3.60	P2-P3 2.92

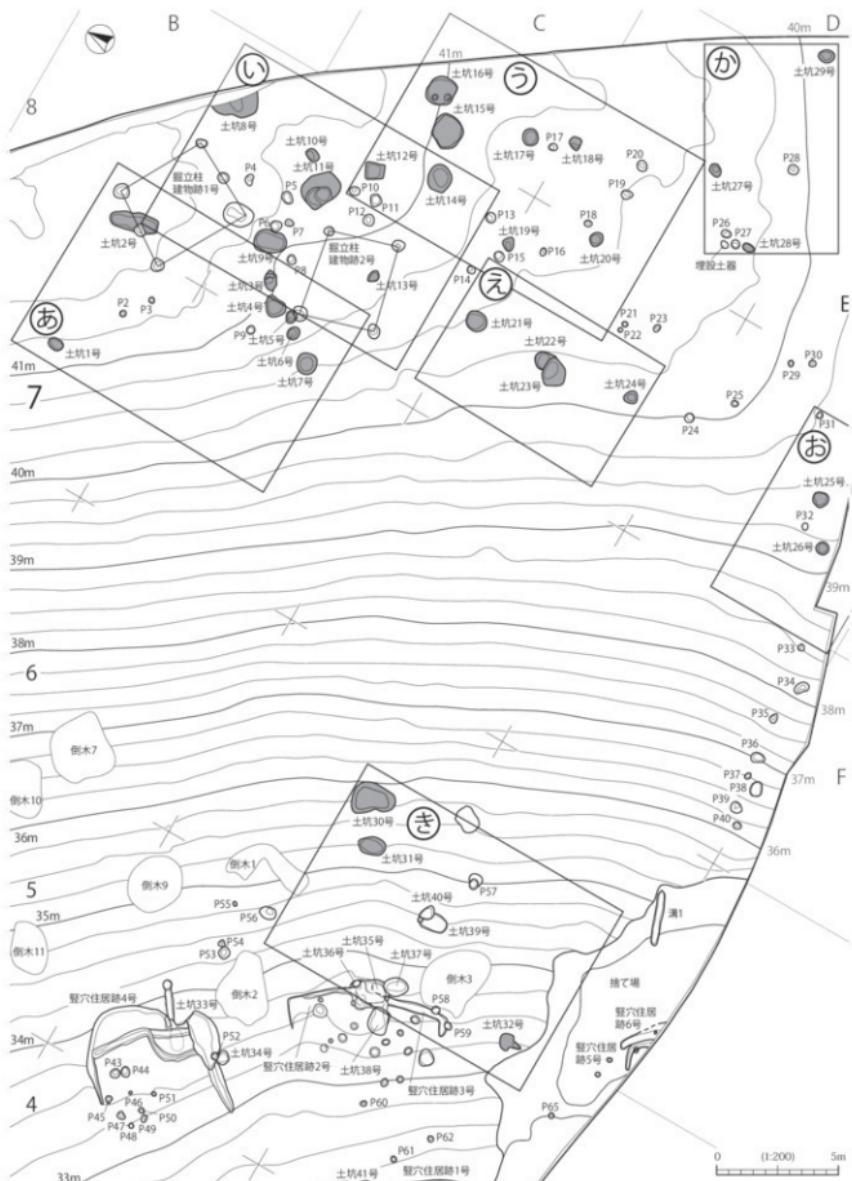
ピットNo	P1	P2	P3	P4
長径(cm)	62	42	52	62
短径(cm)	60	36	46	50
深さ(cm)	49	46	52	28



第10図 繩文時代 埋設土器

土坑(第11～32図、第5表)

繩文時代の土坑は、計32基検出された。検出面はいずれもⅦ層上面で、埋土は粘性のあるシルト質の灰黄褐色土や黒褐色土が主体である。台の下遺跡の尾根部西端にあたるB～D－8・9区に集中域があり、検出された32基中25基がこの範囲内に位置する。他の7基については、土坑集中域周辺に2基、南側斜面に2基、中段部の斜面に3基検出された。掘立柱建物跡1・2号の周辺に集中が見られ、径が1mを超えるやや大型のものが列状に並んでいる。集中域から緩やかに下る南側の平坦面に集中は見られない。埋土中に遺物を大量に含むものが多くあり、生活に関連の深い貯蔵穴の可能性も考えられるが、削平のため上位が消失し中位～底面付近の検出にとどまったため全体像は不明である。各土坑の計測値は第5表に示した。



第11図 繼文時代 土坑配置図

土坑1号(第12図)

B-7区、上部平坦部の西端で検出され、西側約2m先は急激に下っていく斜面である。平面径が 0.6×0.5 mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは18cmで、断面は浅い皿形を呈している。埋土は、VII層小ブロックを多量に含む灰褐色土である。

埋土中から棒状石製品の破損品が1点出土した。

土坑2号(第12図)

B-8区、土坑1号から東方向約6m離れた、調査区内で最も標高の高い41.5m前後のほぼ平坦な面で検出された。平面径が 2.0×0.8 m、略南北方向に細長い楕円形を呈している。検出面からの深さは28cmで、断面は浅い皿形を呈し、埋土はややしまりのあるVII層小ブロックを少量含むにぶい黄褐色土で、遺物は出土しなかった。

南西側の壁面付近に掘立柱建物跡1号のP2があり、P2を土坑2号が切っているので掘立柱建物跡1号より新しい土坑である。

土坑3号(第12図)

C-8区、わずかに南側へ下っていく平坦面で検出された。平面径が 0.9×0.5 m、略東西方向に細長い楕円形を呈している。検出面からの深さは48cm、断面は検出面から窄まりながら中位で屈曲するバケツ形を呈し、埋土はVII層小ブロックを多く含む固くしまった灰黄褐色土である。

埋土中より土器片1点、剥片が1点出土した。

土坑4号(第12図)

C-8区、土坑3号の南西方向に隣接して検出された。平面径が 0.9×0.8 mの略東西方向が長い洋梨形を呈しており、検出面からの深さは31cmである。断面は東側が浅く西側が深い匙形を呈し、東側が固くしまった黄褐色土、西側がしまりのない黄褐色土である。断面形状から複数の土坑の切り合いかを考えられたが、確認されなかった。

埋土中より遺物の出土は無かった。

土坑5号(第12図)

C-8区、土坑4号の南隣、4号と土坑6号に挟まれた平坦面で検出された。掘立柱建物跡2号のP1を切っているので、掘立柱建物跡2号より新しい土坑である。平面径は 0.6×0.4 m、略東西方向に長い楕円形を呈しており、検出面からの深さは24cmで、断面形状は鍋形を呈している。埋土は、VII層小ブロックを多く含む固くしまった灰黄褐色土である。

埋土中より遺物の出土は無かった。

土坑6号(第12図)

C-8区、土坑5号の南西方向に隣接した平坦面で検出された。土坑3~6号は北東方向から南西方向へ列状に近接している。平面径が 0.6×0.5 mのほぼ円形を呈しており、検出面からの深さは18cmで、断面は浅い皿形を呈している。埋土は、VII層小ブロックを多く含む固くしまった灰褐色土である。

埋土中より遺物の出土は無かった。

土坑7号(第12・14図)

C-7区、上段の平坦面西端に位置し、土坑西側には急斜面が迫っている。平面径が 0.9×0.8 m

の円形を呈し、検出面からの深さは 39cm で、断面は直に立ち上がる鍋形である。埋土は、VII 層小ブロックを含むややしまりのある褐色土で粘土質であるが、下位に比べて上位へ向かうとしまりがなく、VII 層も細粒である。

埋土中から土器が 3 点、石器が 3 点の計 6 点出土し、その中から土器 1 点、石器 3 点を実測し掲載した。7 は縄文土器の胴部である。縄文時代後期のものと思われるが器面の摩滅が激しい。8 は体部から脚部にかけて膨らみを持つ玉韁製の石鎌である。薄手で先端部は鋭く側面も剥離が明瞭であり丁寧に作成されている。9 は粘板岩製の石核であり、かなり大型のものである。10 は閃綠岩製の台石の破損品である。上面に敲打痕が残る。出土状況から自然に流れ込んだとは考えられず、使用後廃棄された可能性が高い。

土坑 8 号(第 13・14 図)

B-8 区、調査区北東部分を頂点とした尾根上の平坦面が東側へ向かって緩やかに下り始める場所で検出された。面積も広く、果樹園として造成された調査区外へ広がっていたので自然地形も考えられたが、遺物の出土状況や断面から判断し遺構扱いとした。検出部分の平面径が 1.9×0.8 m、調査区境に沿って細長い長楕円形を呈している。検出面からの深さは 44cm で、調査区外へ向かって深くなっている。断面の全体形は不明であるが、検出部分は浅いレンズ状を呈し、埋土はしまりのない灰黄褐色土である。

埋土中から遺物が 2 点出土し、その中から石器 1 点を実測し掲載した。11 は砂岩製の凹石である。表裏、両側面に凹みを持つもので、敲石としても使用し両先端部には敲打痕が残る。

土坑 9 号(第 13・14 図)

C-8 区、土坑 3 号の北東方向約 1m のほぼ平坦面で検出された。略南北方向に長い平面径が、 1.3×0.9 m の楕円形で、検出面からの深さは 54cm で、断面は深鍋形を呈している。埋土はしまりのあるにぶい黄褐色土で、VII 層小ブロックや炭化物がわずかに混ざり、底面に近いほどしまりが弱い。掘立柱建物跡 1 号と 2 号に挟まれていることから、それらに関連する土坑の可能性を考えられる。

埋土中から土器が 4 点出土し、4 点中 1 点について実測し掲載した。12 は開き気味に立ち上がる深鉢の口縁部であり、条痕文が残る外面に沈線を交差するように施す。

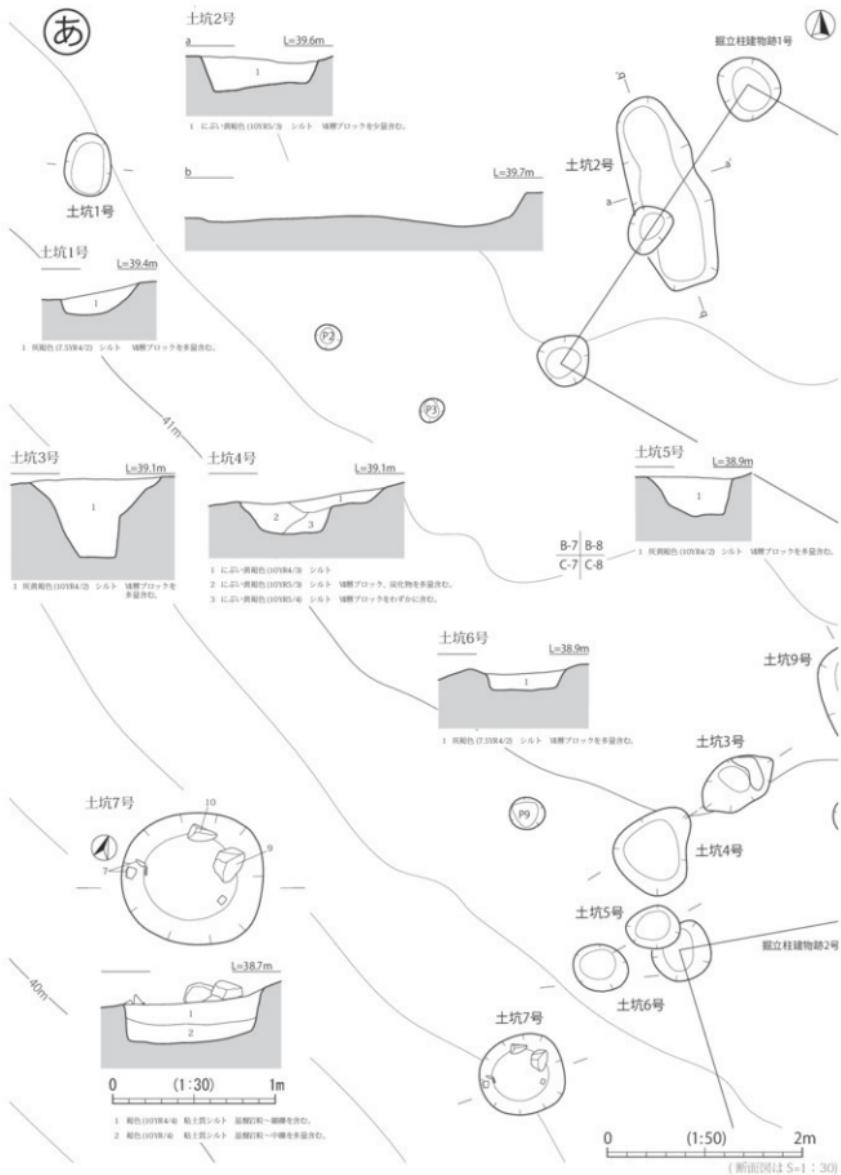
土坑 10 号(第 13・14 図)

C-8 区、土坑 11 号の北東方向に隣接して検出された。掘立柱建物跡に挟まれ列状に並ぶ土坑群の東端に位置する。平面径が 0.6×0.5 m で、略南北方向が長い長方形を呈しており、検出面からの深さは 23cm で、断面は逆台形を呈している。埋土は、VII 層小ブロックを多く含んだ灰黄褐色硬質土である。

埋土中より同一個体の土器片が複数出土した。全体ではないが部分的に復元可能なため、1 点として扱い実測し掲載した。13 は胴部に膨らみを持ち、くの字状に開く口縁部を持つ深鉢である。外面に縄文を施すが、摩滅が激しい。

土坑 11 号(第 13・15 図)

C-8 区、土坑 10 から南西方向へ隣接した平坦面で検出された。平面径が 1.7×1.4 m のやや大型のもので、略東西方向に長い闊丸方形を呈している。検出面からの深さは 51cm で、断面は



第12図 縄文時代 土坑1~7号

東側が長い逆台形を呈しており、底面西側に小ピット状の掘り込みが確認される。埋土は、西側が固くしまった黄褐色土で、東側がややしまりのない灰黄褐色土であり、全体にⅦ層小ブロックが混ざる。断面や埋土状況から、柱の引き抜き痕の可能性が考えられる。

埋土中より石器が1点出土したので実測し掲載した。14は凝灰岩製の礫器である。棒状で下面に刃部を持つ。

土坑12号(第13・15図)

C-8区、土坑11号の南東約1m離れた平坦面で検出された。周辺には1mを超える土坑が多くあり、大型の土坑に囲まれた立地である。平面径が 1.0×0.9 mのほぼ正方形を呈し、検出面からの深さ50cmで、ほぼ方形に近い断面形状である。検出状況から人為的に方形を意識して掘られたものと考えられる。埋土は、Ⅶ層小ブロックを含む黄褐色土で、底面へ向かって小ブロックが細かく混ざる。

埋土に遺物が多く含まれ、土器片10点、石器17点の計27点が出土した。土器は摩滅した小破片が多かったため、石器4点について実測し掲載した。15は安山岩製の磨製石斧であり、両面研磨による鋭利な刃部に敲打痕が残る。16は変質安山岩製の礫器であり、下面から右側面にかけて刃部を持つ。17はホルンフェルス製の棒状をした敲石であり、端部に敲打痕が残る。18はホルンフェルス製の砥石であり、表面に砥面を持つ。

土坑13号(第13・15図)

C-8区、掘立柱建物跡2号内で検出された。平面径が 0.6×0.4 mで、略東西方向に長い楕円形を呈している。検出面からの深さは9cmで、断面は浅い皿状を呈する。埋土は粘性の弱い褐色土で、小礫や炭化物が少量混ざる。

埋土中から石器が2点出土しているが、土坑の規模に比べるとやや大型のものが2個だけ置かれたように出土し、その他の遺物は出土しなかった。掘立柱建物跡2号内に位置していることから建物と何らかの関連があると推定される。19、20は砂岩製の板状石皿である。19は完形で表面に磨痕や線状の敲打痕、両面に凹みが残る。20は一部欠損しているが、表裏両面に磨痕と敲打痕が明瞭に残る。

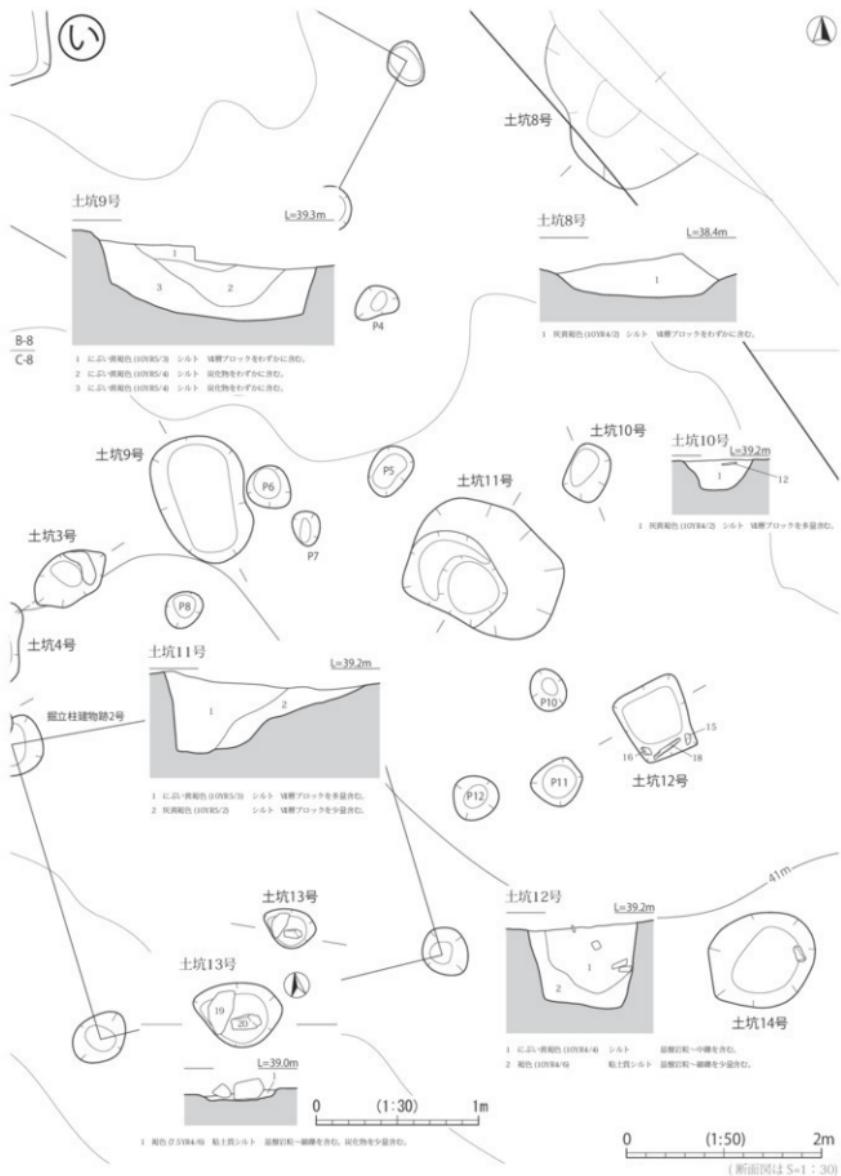
土坑14号(第27図)

C-8区、土坑12号から東方向へ約5m離れた平坦面で検出された。東隣には同規模の土坑が2基列状に並び、調査区外にも同規模の土坑が存在する可能性がある。平面径が 1.2×1.0 mのほぼ円形を呈したやや大きめのもので、検出面からの深さ47cmである。断面形状はわずかに開く鍋状を呈し、埋土は下位が灰黄褐色土、上位がにぶい黄褐色土である。全体に固くしまっておりⅧ層小ブロックを含むが、底面に近いほど小礫が多く混ざる。

埋土中から石器が1点出土したが小片のため図化しなかった。

土坑15号(第16~18・27図)

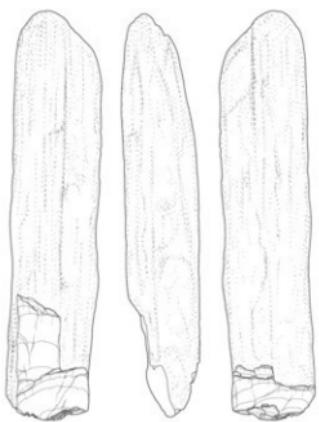
C-9区、土坑14号の北東側約70cm離れた平坦面で検出された。平面径が 1.4×1.3 mのほぼ円形を呈しており、検出面からの深さは19cmと規模に対して浅いが削平により上位が消失したと思われる。断面形状は底面の平らな皿形を呈し、埋土は細かいⅧ層岩粒を含むしまりのない褐色土で、底面近くに大量の土器や石器が全体的に散乱した状態で出土した。北側にやや遺物の



第13図 繩文時代 土坑 8~13号



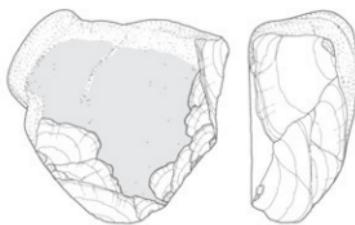
第14図 土坑7～10号 出土遺物



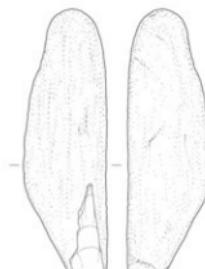
14



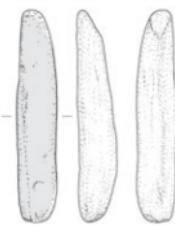
15



16

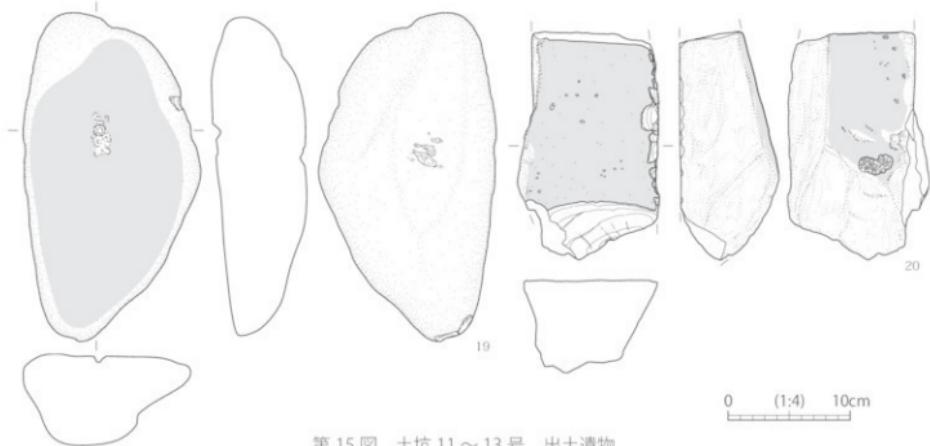


17



18

0 (1:3) 10cm



19

20

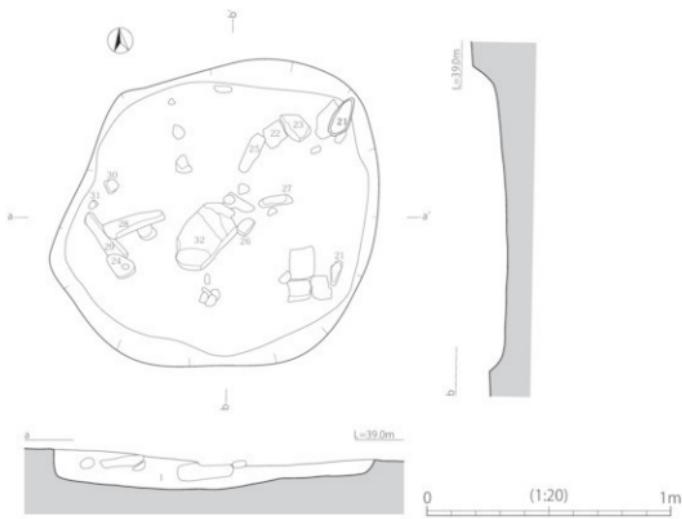
0 (1:4) 10cm

第15図 土坑11～13号 出土遺物

集中が見られるが、土坑全体に広がっており、大型の石器が含まれほぼ同レベルでの出土であることから、一括廃棄として投げ込まれたものと推測される。

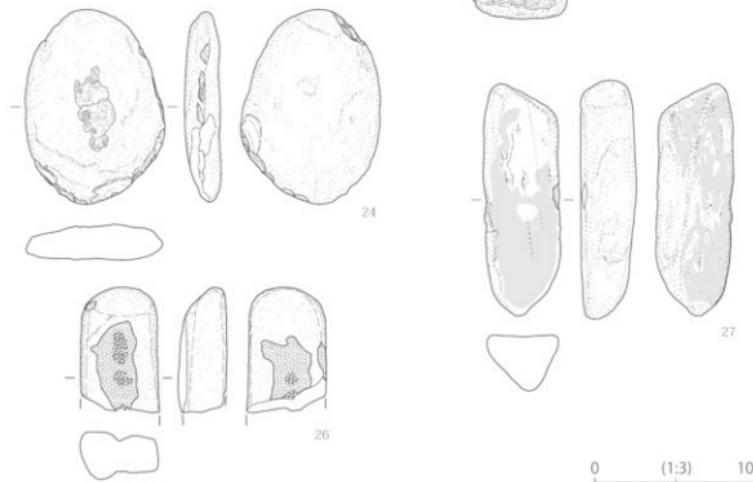
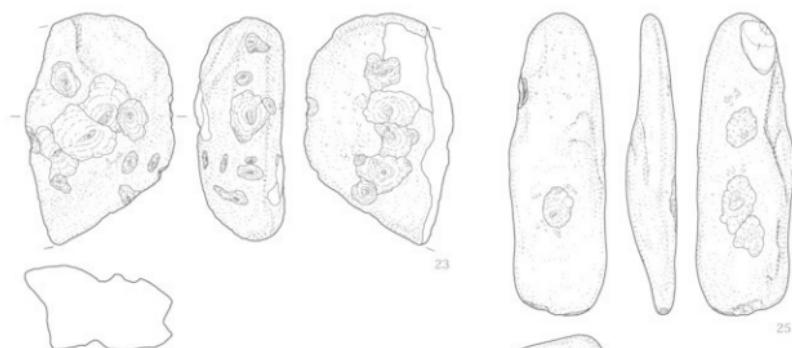
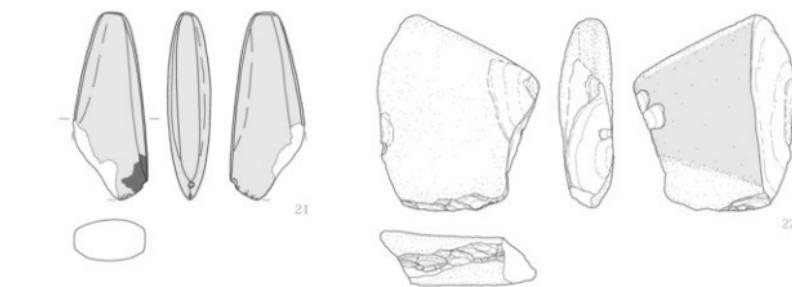
埋土中より土器 10 点、石器 20 点の計 30 点の遺物が出土している。その中から石器 12 点について実測し掲載した。土器は小破片であり摩滅も激しいことから図化できなかった。

21 は砂岩製の磨製石斧である。刃部が一部欠損しているが、全面研磨され丁寧な作りである。22 は砂岩製の礫器である。表面に磨面が残るので、破損したものを転用した可能性が高い。23 ~ 26 は凹石である。23 は砂岩製で、表裏両面および側面に敲打による無数の凹みが残る。24 は粘板岩製のもので、下端がローリングを受け不明瞭である。25 は凝灰岩製で棒状を呈し下端に敲打痕が認められる。26 は砂岩製のもので、表裏中央に敲打の集中が見られる。27 は凝灰岩製の砥石であるが、側面に敲打による凹みを持つので最終形は凹石としての使用と考えられる。28・29 は棒状を呈したやや大型の敲石であり、敲打痕に付着物が残る。28 は粘板岩製で上部が欠損し折損部に二次使用的剥離が見られる。29 は砂岩製で両端に使用痕が残る。30 は磨石である。安山岩製で両面に磨面を持つ。31 は砂岩製の敲石で、剥片石器の二次加工用と思われる。32 は閃綠岩製の台石である。表裏に摺理による段差を持ち、全体に敲打痕が広がる。



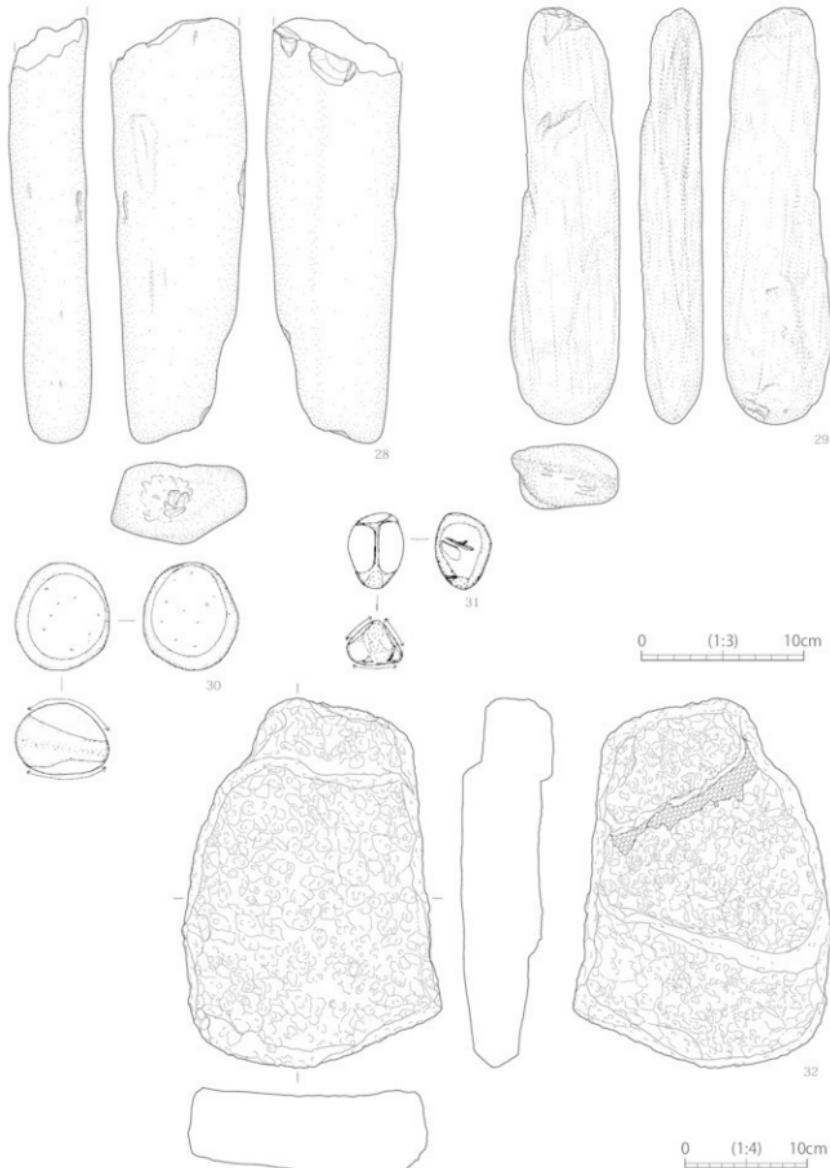
1: 鋸齿 (100×40) 基土四辺縁に基盤を含む。炭化物を少箇点在。圓文土器、石器が併発現。

第 16 図 繩文時代 土坑 15 号



0 (1:3) 10cm

第17図 土坑15号 出土遺物①

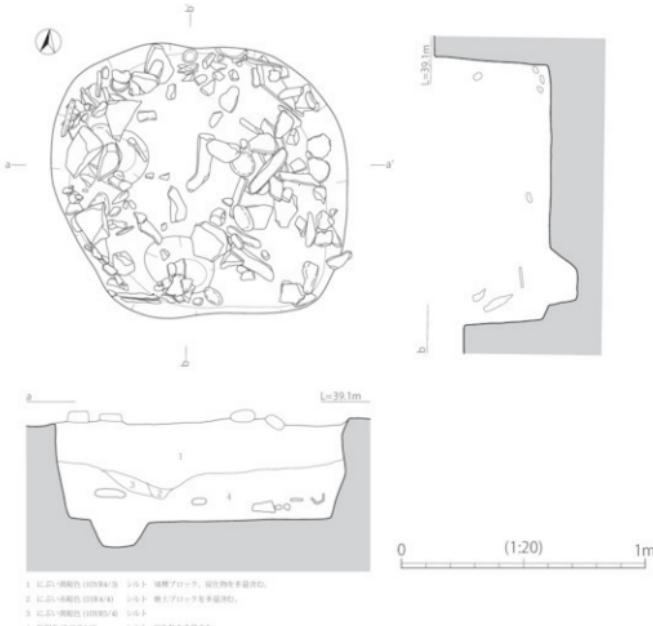


第18図 土坑15号 出土遺物②

土坑16号(第19~26図)

C-9区、土坑15号の北東側約50cm離れた平坦面で隣接して検出された。平面径が 1.5×1.2 mのほぼ円形を呈しており、検出面からの深さは36cmである。断面形状は底面の平らな深鍋形を呈しているが、15号と同じように上位が消失しており全体像は不明である。底面西側に平面形が 29×23 cm、 24×23 cm、深さ10cm程度の2基の小ピットが確認され、昇降用の構造物の痕跡であると考えると、貯蔵穴として利用されていた可能性が推測される。埋土は上層と下層に分かれ、上層はV層小ブロックや炭化物を多く含むにぶい黄褐色土であり固くしまっている。下層は固くしまりのある灰褐色土で、やや粘性があり炭化物が混ざる。上下層の境界付近に焼土ブロックを多量に含む灰褐色土が見られる。

埋土中より土器57点、石器90点の計147点の遺物が出土した。上層の遺物は、表土直下から約10cm程度の間に磨石・敲石、礫器などを中心に62点が出土した。部分的な集まりは見られるが、上層検出面全体に広がって出土しており石皿や台石の破損品も含まれることから、土坑内に不要品の廃棄場として利用していたと考えられる。無遺物層を挟み上層から約20cm~底面までの下層からは85点が出土した。床面直上からの出土はほとんど無く、土器片や磨石・敲石、棒状石製品など85点中60点以上が床下2~10cmの範囲に土坑を埋め尽くすように出土した。その他の遺物は下層全体からレベル差を持って出土しており、焼土ブロックも見られることから、



第19図 繩文時代 土坑16号

貯蔵穴としての役割を終えた後、不要な遺物や排土などの廃棄場としてある一定期間持続して利用されていたと推定される。また、中断期間を挟んで再度廃棄場として利用されたと考えられ、ほぼ同時期であるが、ある程度の時間差を持った廃棄土坑と思われる。

埋土中から出土した遺物 147 点中、土器 8 点、石器 36 点の計 44 点について実測し掲載した。内訳は上層の土器 3 点、石器 19 点の計 22 点、下層の土器 5 点、石器 17 点、計 22 点であり、上層と下層を分けて掲載した。33～53 は上層出土、54～70 は下層出土遺物である。

33 は深鉢の直線的に立ち上がる口縁部である。幅広の沈線文を施す。34 は鉢の底部で、体部下位のみの出土のため全体形は不明である。胴部との境目に屈曲を持つ。

35～38 は礫器である。35 は砂岩製で、大型剥片を使用している。36・37 は薄手のホルンフェルス製で、36 は側縁に不規則な剥離があり表面に凹みを持つ。37 は表裏面に敲打による浅い凹みがあり、全面研磨されている。38 は砂質片岩製で、刃部を下端に持ち表裏両面に摺理による分割面が残る。39～41 は大型剥片を素材として使用した二次加工剥片である。39 は砂岩製、40・41 はホルンフェルス製であり、41 は側縁の一部に両極は剥離による抉れがあり、粗製石匙の可能性がある。42・43 は棒状石製品である。42 は凝灰岩製で表裏両面に研磨痕が見られ、43 は砂岩製である。44 はホルンフェルス製の楔形石製品であり、両側面、両端に敲打による剥離が認められる。表裏面に小さな凹みが無数に残り台石として使用と思われる。45 は安山岩製の磨石で、46 は安山岩製の磨石・敲石である。47・48 は敲石で、47 は花崗岩製で摩滅が激しく、48 は砂岩製で棒状を呈し下面には明瞭に敲打痕が残る。49 は凝灰岩製の敲石である。全面に研磨を施し、両端に敲打痕が残る。50・51 は粘板岩製の棒状を呈した凹石である。どちらも表面に敲打による凹みがあり、51 は両端部に敲打痕が残る。52 は砂岩製の石皿であり、大部分欠損しており板状を呈す。53 は閃綠岩製の台石で、欠損しており部分的な出土である。

54・55 は直線的に立ち上がる深鉢の口縁部である。54 は繩文による器面調整後不規則な沈線文を施し、部分的にナデ消している。内面に付着物が残り、55 は口縁部に残る。56 は開き気味の体部が口縁部付近で内傾し口縁端部で外反するもので、屈曲部に小突起が巡る。57 は胴部片で外面に斜位の条痕を不規則に施す。58・59 は鉢類の底部で上部形態は不明である。58 は摩滅により調整痕が不明であるが、底面に網代痕が明瞭に残る。59 は器面調整後沈線文を施したもので、底径は 12cm である。

60 は砂岩製の礫器である。大型剥片を用いたもので端部に使用による剥離が残る。61・62 はホルンフェルス製の大型剥片を素材にした二次加工剥片である。61 は欠損部に微細な剥離痕が残る。63 は大型剥片を素材にしたホルンフェルス製の微細剥離剥片である。末端部に微細な不規則剥離が認められる。64・65 は棒状石製品であり、64 は粘板岩製で下端は剥離により欠損している。65 はホルンフェルス製で下端に使用痕が残る。66～68 は楔形石製品である。66 はホルンフェルス製で、敲打や研磨により「く」字形に成形し使いやすくしている。両端に敲打による剥離が見られ、裏面に凹みが残る。67 は粘板岩製のもので、打製石斧未製品の可能性がある。68 は砂岩製のもので表面に研磨成形痕が残る。69 は輝石安山岩製の磨石であり、表裏両面に微弱な摩痕が残る。70 は閃綠岩製の磨石、71 が安山岩製の磨石・敲石、72 が凝灰岩製の敲石で、72 は周縁に微弱な敲打痕が残る。73 は棒状を呈した粘板岩製の敲石である。下端に敲打痕が残り、上面

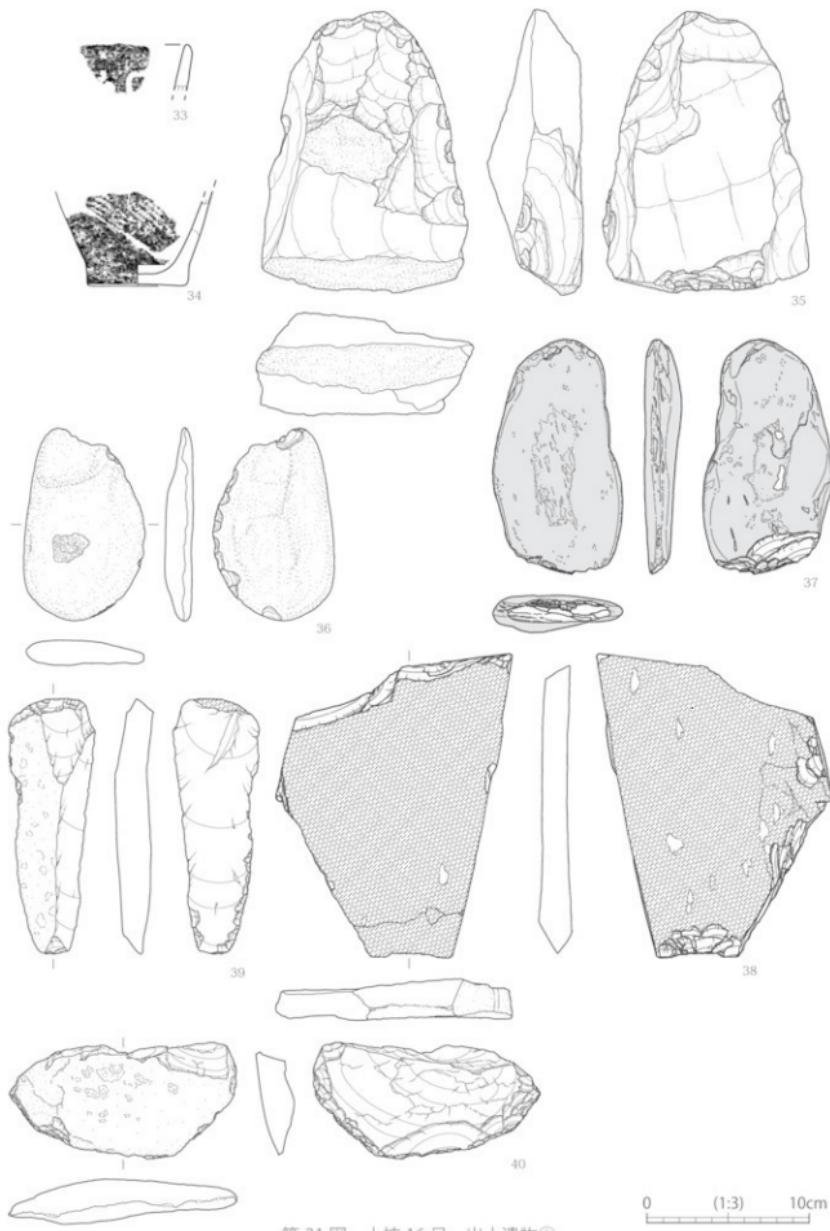
(上層)



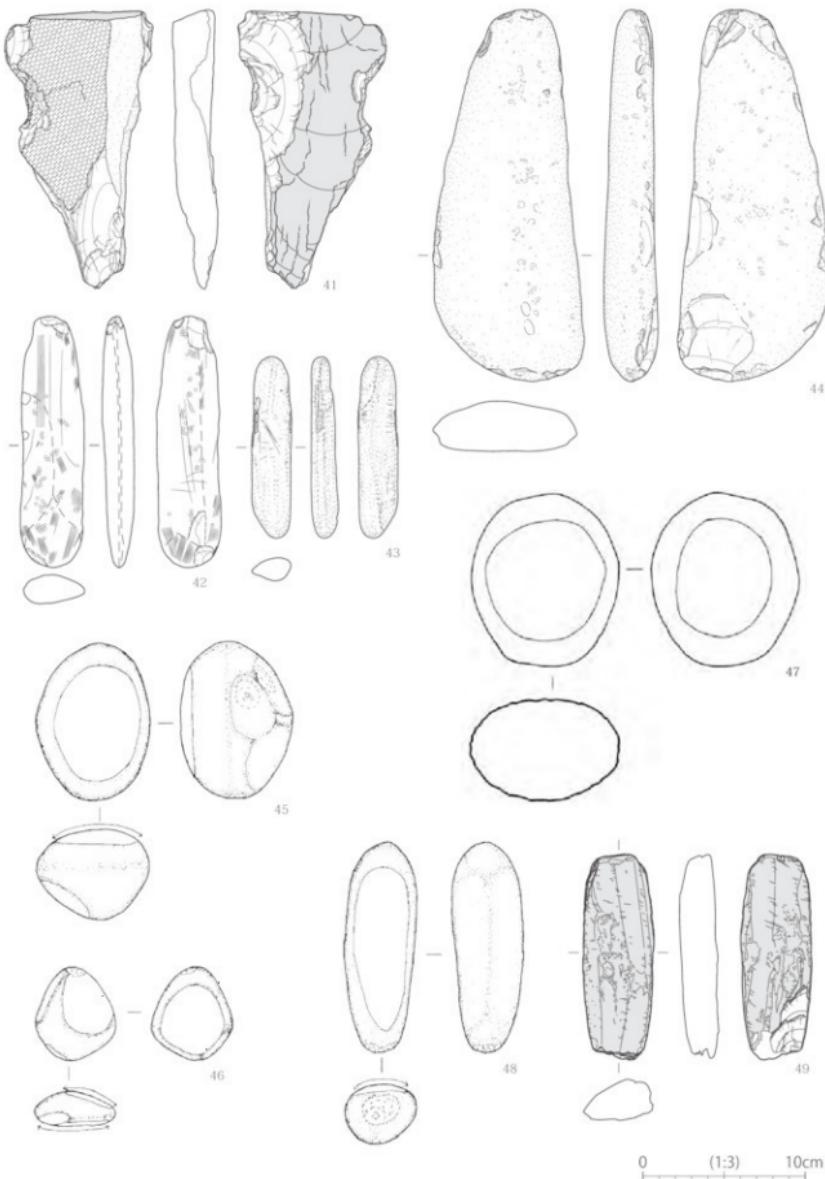
(下層)



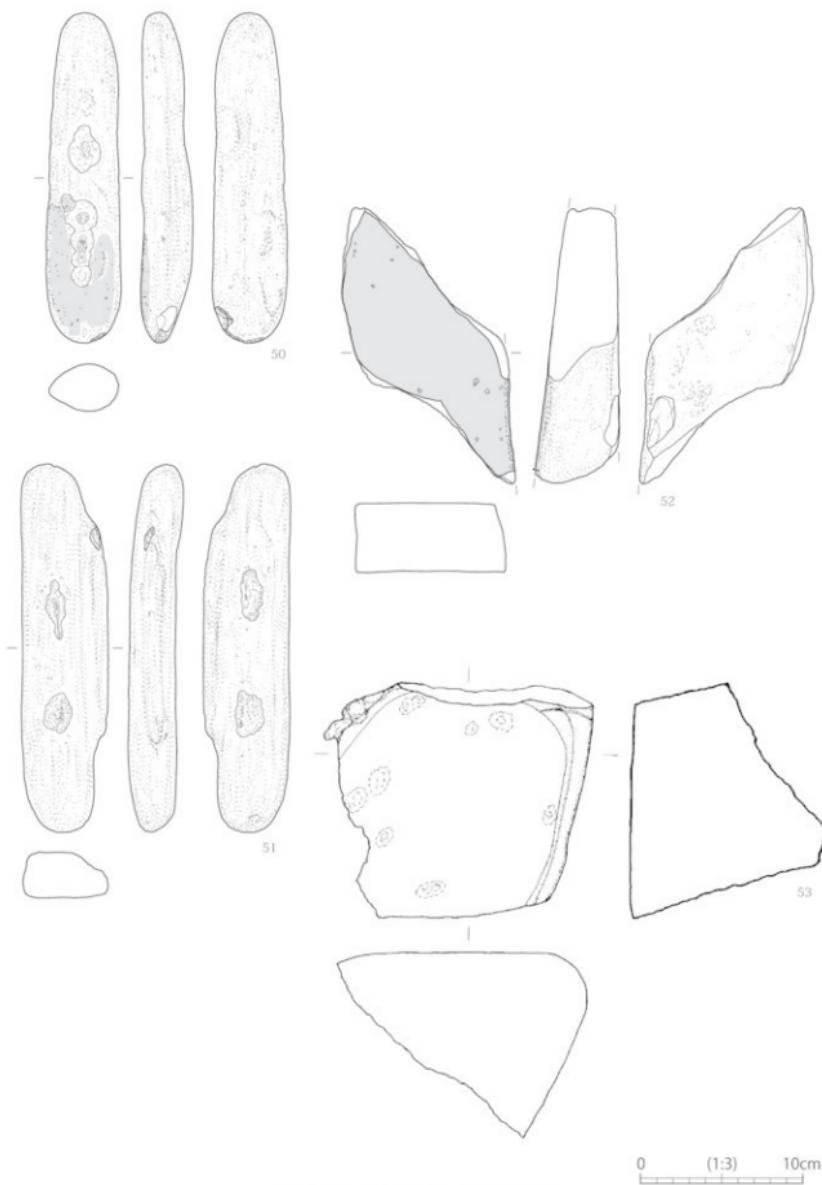
第20図 土坑16号 遺物出土状況



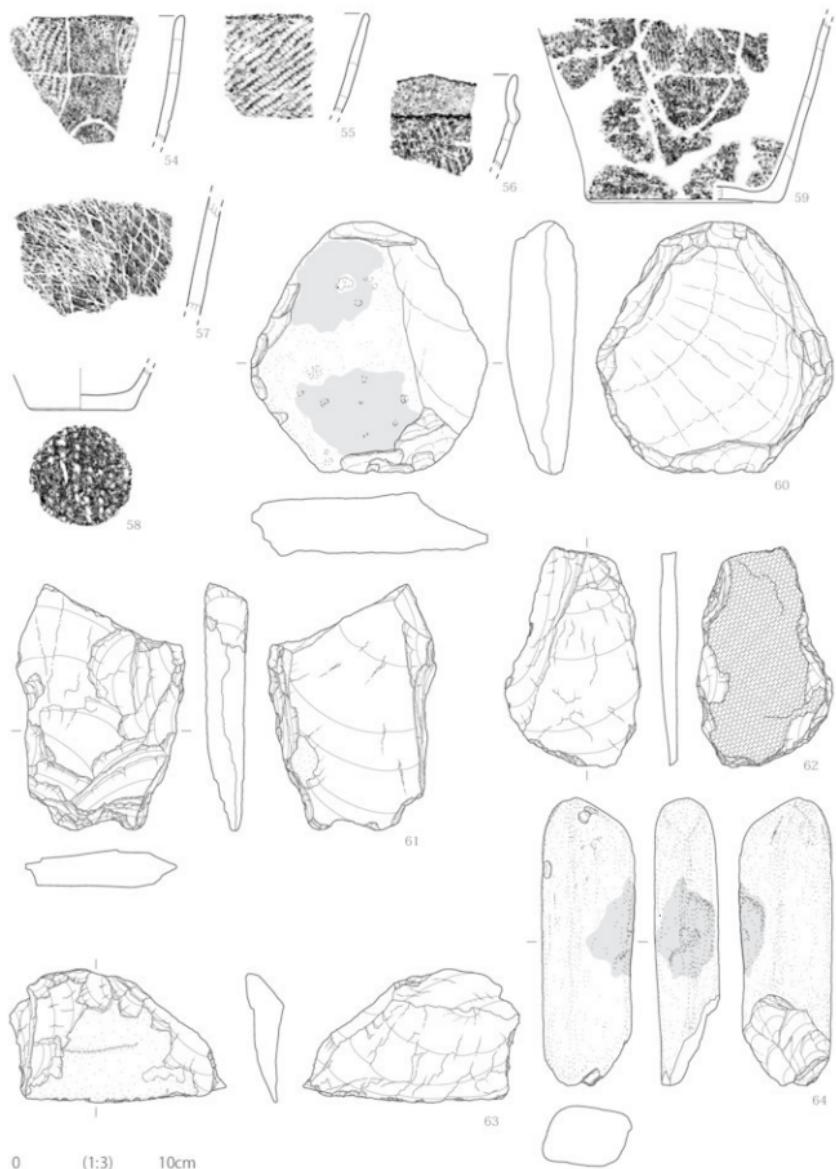
第21図 土坑16号 出土遺物①



第22図 土坑16号 出土遺物②



第23図 土坑16号 出土遺物③



第24図 土坑16号 出土遺物④



第25図 土坑16号 出土遺物⑤

欠損部に微細な剥離が認められる。74は砂岩製の凹石で、表裏側面に敲打による凹みが残る。欠損部縁辺に敲打痕が見られる。75は花崗岩製の台石で、摩滅の度合いは中心に向かって強くなる。76は砂岩製のスタンプ形石器である。下面に敲打による剥離が残る。

土坑17号(第27図)

C-6区、土坑14～16号から南方向へ約3m離れた平坦面で検出された。平面径が 0.7×0.6 mの円形を呈し、検出面からの深さは27cmである。断面は逆台形を呈し、埋土はややしまりのあるにぶい黄褐色土でⅦ層小ブロックが混在する。

埋土中から遺物は出土しなかった。

土坑18号(第27図)

D-9区、土坑17号の南側約1.5m離れて検出された。平面径は 0.6×0.5 mのほぼ円形を呈しており、検出面からの深さは61cmとやや深い。断面形状は東側がやや開き気味のバケツ形を呈している。埋土は、上面から底面にかけて東側半分がにぶい黄色土で、西側半分が黄褐色土であり、どちらも固くしまっている。柱穴の抜き取り痕の可能性がある。

埋土中から遺物は出土しなかった。

土坑19号(第27・32図)

D-8区、土坑18号から西方向へ約4.5m、土坑14号から南方向へ約3.5m離れた平坦面で検出された。平面径が 0.6×0.5 mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは27cmである。断面は東側のやや開いた逆台形を呈し、埋土はしまりのあるにぶい黄褐色土でⅦ層の細粒を含んでいる。また、底面隅には壁面から崩落したと思われるⅦ層の小ブロックが堆積していた。

埋土中から土器片が8点出土した。これらは土坑北側に重なるようにして出土し、同一個体であると判明した。77は直線的に聞く深鉢で、口縁部近くでわずかに屈曲する。器面調整後に横位の沈線文を施す。底部形状は欠損のため不明である。

土坑20号(第27図)

D-8区の平坦面で検出された。ピットに囲まれているが、周間に土坑は見られず単独で位置する。平面径は 0.6×0.5 mの円形を呈しており、検出面からの深さは38cmで、断面はやや不定型なボウル形を呈する。埋土は、Ⅶ層の小ブロックをわずかに含む黄褐色土の單一層である。

埋土中から土器3点、石器1点の計4点出土したが、小片のため図化しなかった。

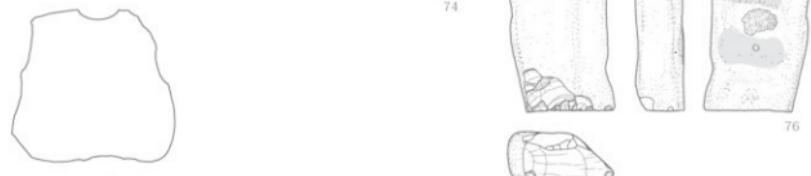
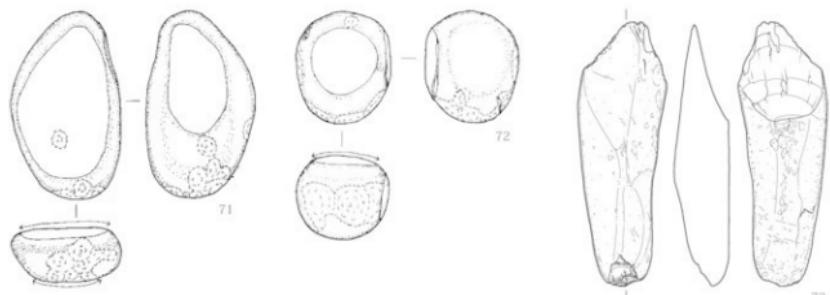
土坑21号(第28図)

D-8区、土坑19号から西方向へ約3m、わずかに下っていく平坦面で検出された。平面径が 0.9×0.8 mの円形を呈し、検出面からの深さは22cmで、断面は浅い皿形を呈する。やや底面に凹凸が見られる。埋土はⅦ層小ブロックを多量に含む固くしまった黄褐色土である。

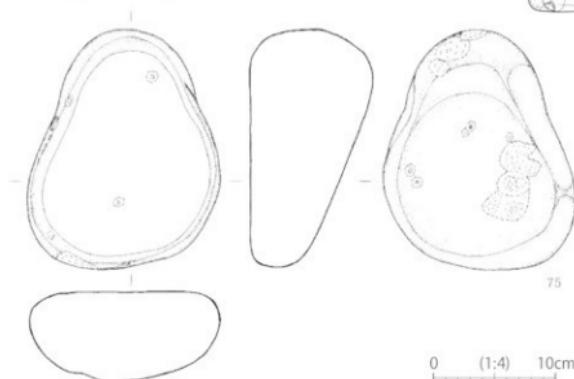
埋土中より遺物の出土はなかった。

土坑22・23号(第28図)

D-8区、土坑21号から南方向へ約3m、わずかに下っていく緩斜面で検出された。約3m程度西側は急斜面であり、上段平坦部の西端に位置する。土坑22号は南側の一部を23号に切られており、切り合ひ関係から22号が23号より時期が古い土坑である。22号の検出平面形は 0.7×0.8 mの楕円形を呈し、検出面からの深さ25cmである。断面の全体形状は不明で、埋土は固

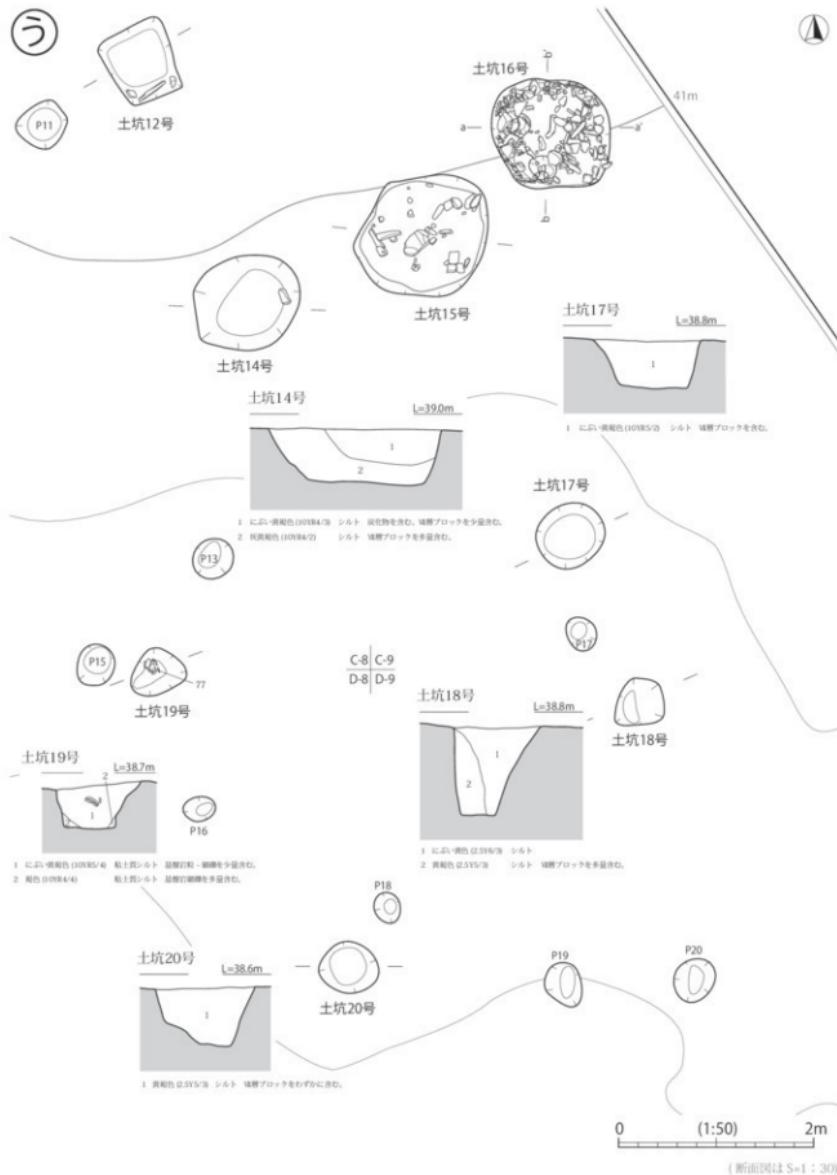


0 (1:3) 10cm



0 (1:4) 10cm

第26図 土坑16号 出土遺物⑥



第 27 図 繩文時代 土坑 14 ~ 20 号

くしまったにぶい黄褐色土である。23号の平面形 1.2×1.0 mの不定型な楕円形を呈し、検出面からの深さ28cmで、断面形状は南側が立ち上がるレンズ状である。埋土はⅦ層小プロックを多量に含む灰褐色土である。

土坑23号の埋土中から、土器の小破片が1点出土した。

土坑24号(第28図)

D-E区、土坑23号から南方向へ約3m、わずかに下っていく緩斜面で検出された。西側は急斜面であり、21~24号は、上段平坦部の西端に沿ってほぼ等間隔で位置し、何らかの関連があると思われる。平面径は 0.5×0.5 mの円形を呈しており、検出面からの深さは13cmと浅い。断面は皿形を呈し、埋土はⅦ層の小プロックを多量に含むにぶい黄褐色土で、固くしまっている。

埋土中から遺物の出土は無かった。

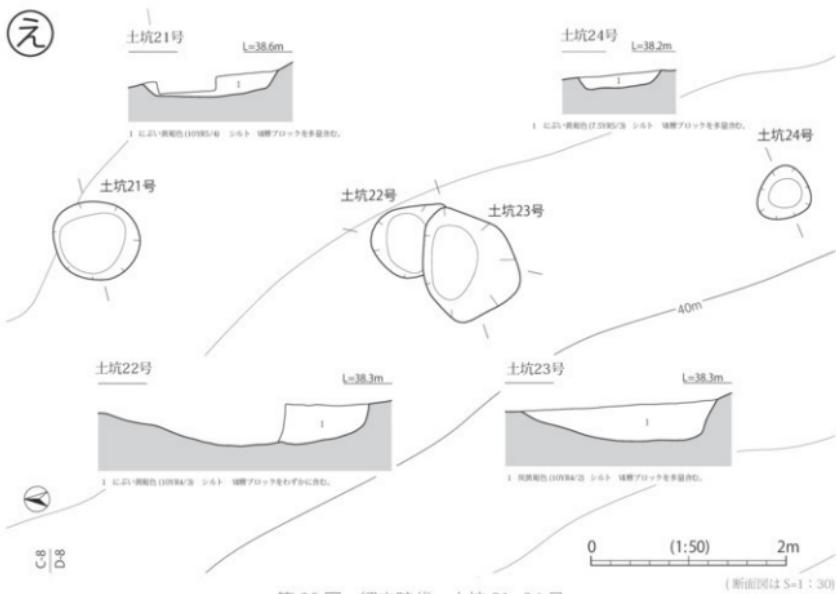
土坑25号(第29図)

E-E区、西側へ下っていく緩斜面で検出された。斜面の南側約5mは切り立った崖状の地形で調査区の南端に位置する。平面径は 0.7×0.6 mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは12cmである。断面は浅い皿形を呈し、埋土はⅦ層の小プロックを少量含む固くしまった黄褐色土で、炭化物がわずかに混在する。

埋土中より土器の小破片が3点出土した。

土坑26号(第29図)

E-E区、土坑25号から南西方向へ約1.5m下った斜面で検出された。平面形は 0.5×0.5 m



の円形を呈している。検出面からの深さは 34cm で、断面は深いボウル形を呈し、埋土は、固くしまったⅦ層小プロックを少量含む灰褐色土で、炭化物をわずかに含む。

埋土中より土器片が 1 点出土したが、図化できなかった。

土坑 27 号(第 30 図)

D-9 区、わずかに南方向へ下っていく平坦面で検出された。平面径が 0.6×0.4 m で、ほぼ円形を呈している。検出面からの深さは 31cm で、断面はやや深さのあるボウル形を呈し、埋土はⅦ層小プロックを少量含む黒褐色土でややしまりがある。

埋土中に小破片の土器片が 1 点出土した。

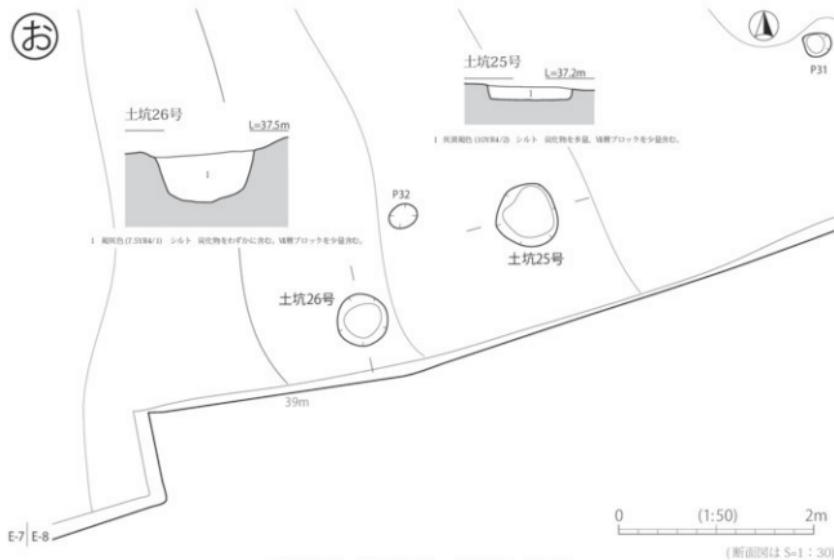
土坑 28 号(第 30・32 図)

D-9 区、土坑 28 号から南西方向へ約 3 m 離れた平坦面で検出された。埋設土器、P 26・27 と隣接しており、遺構の集中が見られる。平面径が 0.5×0.3 m、略南北方向に細長い楕円形を呈し、検出面からの深さは 11cm で、断面は浅い皿形を呈している。埋土は固くしまった黄褐色土である。

埋土中から全長約 38cm を超える大型の台石が出土した。土坑内にようやく納まるサイズであり、埋設土器も近接していることから埋納遺物の可能性も考えられたが、底面からやや浮いた状態での出土のため確定できなかった。78 は閃緑岩製の台石で、表面が劣化により凸凹しているが、欠損部に敲打痕が残る。

土坑 29 号(第 30 図)

D-10 区、わずかに南方向へ下っていく平坦面で検出された。調査区内の最東端に位置し、



第 29 図 繩文時代 土坑 25・26 号

周辺に遺構は見られず単独での検出である。平面径が 0.7×0.5 mの略南北方向へ長い楕円形を呈している。検出面からの深さは77cmと深く、断面はやや深さのある鍋形を呈し、埋土は粘性の弱いⅦ層小プロックを少量含む黄褐色土であり下位はややぶくなる。

埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑30号(第31図)

D-6区、南西方向へ向かって下っていく斜面で検出された。平面径が 1.8×1.2 mとやや大型で、南側が小さく西側が凹む不定型な楕円形を呈している。検出面からの深さは45cmで、断面は浅いレンズ形を呈し、埋土は固くしまったにぶい黄褐色土で炭化物をわずかに含む。

埋土中から土器片が9点出土したが、小片のため掲載しなかった。

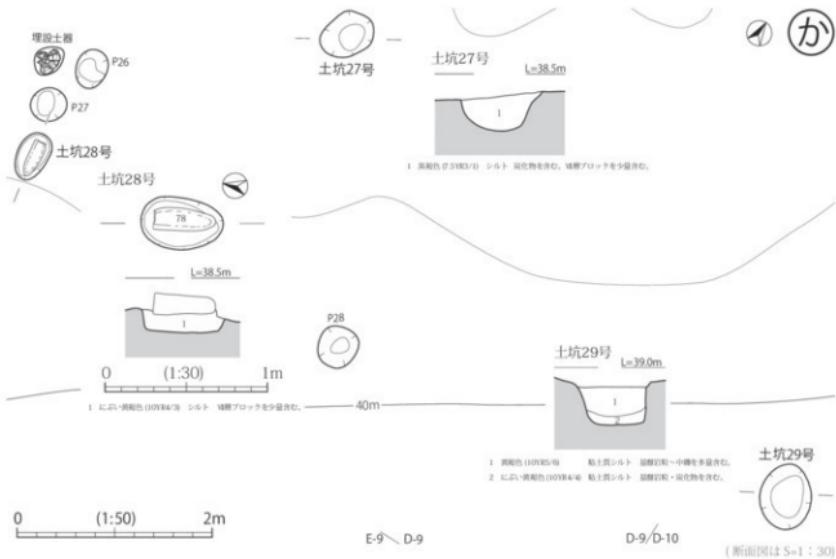
土坑31号(第31図)

D-6区、土坑30号の西侧約1mの位置、南西方向へ向かって下していく斜面で検出された。平面径が 1.1×0.7 mで、略南北方向へ長い楕円形を呈している。検出面からの深さは48cmで、断面はボウル形を呈している。埋土は上位に固くしまったやや粘性のある褐灰色土があり、下位はⅦ層小プロックを多量に含むにぶい黄褐色土である。

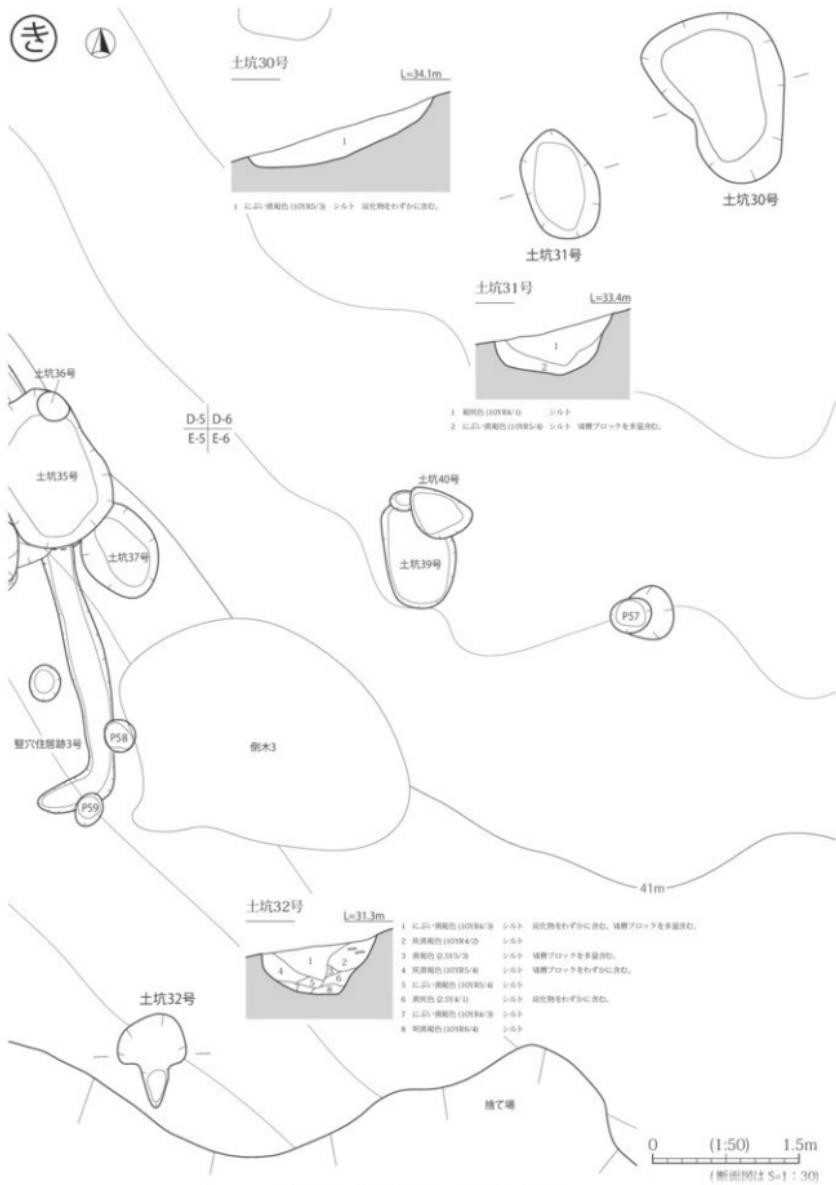
埋土中から土器片が2点出土したが、小片のため掲載しなかった。

土坑32号(第31・32図)

E-5区、竪穴住居跡3号から南方向へ約3m離れ、南側へ下る斜面で検出された。南側半分は確認トレンチにより上位が削平されているが、検出された平面径が 1.0×0.7 m、略南北方向にやや楕円形を呈し、検出面からの深さは33cmで、断面はやや深めのボウル形を呈している。



第30図 繩文時代 土坑27~29号



第31図 繩文時代 土坑 30~32号

埋土は上位が固くしまった黄褐色土でⅦ層小ブロックを多量に含む。中位から底面にかけては、自然堆積によると思われる灰黄褐色土とにぶい黄褐色土の互層が見られどちらも固くしまっている。

埋土中から土器片 16 点、石器 4 点の計 20 点の遺物が出土した。土器片は小片のため図化できなかったが、石器 2 点について実測し掲載した。79 は輝石安山岩製の打製石斧である。厚みのあるもので腹部から下は破断しており打製石斧の基部と考えられる。上端に敲打による剥離が残るが、再利用によるものと思われる。80 は砂岩製の板状を呈した石皿である。表面中央に残る無数



第 32 図 土坑 19~32 号 出土遺物

第5表 繩文時代 土坑規模計測表

遺構	位置	規模		
		長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)
土坑1	B-7	0.6	0.5	18
土坑2	B-8	2.0	0.8	28
土坑3	C-8	0.9	0.5	48
土坑4	C-8	0.9	0.8	31
土坑5	C-8	0.6	0.4	24
土坑6	C-8	0.6	0.5	18
土坑7	C-7	0.9	0.8	39
土坑8	B-8	1.9	0.8	44
土坑9	C-8	1.3	0.9	54
土坑10	C-8	0.6	0.5	23
土坑11	C-8	1.7	1.4	51
土坑12	C-8	1.0	0.9	50
土坑13	C-8	0.6	0.4	9
土坑14	C-8	1.2	1.0	47
土坑15	C-9	1.4	1.3	19
土坑16	C-9	1.5	1.2	36

遺構	位置	規模		
		長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)
土坑17	C-6	0.7	0.6	27
土坑18	D-9	0.6	0.5	61
土坑19	D-8	0.6	0.5	27
土坑20	D-8	0.6	0.5	38
土坑21	D-8	0.9	0.8	22
土坑22	D-8	0.7	0.8	25
土坑23	D-8	1.2	1.0	28
土坑24	D-8	0.5	0.5	13
土坑25	E-8	0.7	0.6	12
土坑26	E-8	0.5	0.5	34
土坑27	D-9	0.6	0.4	31
土坑28	D-9	0.5	0.3	11
土坑29	D-10	0.7	0.5	77
土坑30	D-6	1.8	1.2	45
土坑31	D-6	1.1	0.7	48
土坑32	E-5	1.0	0.7	33

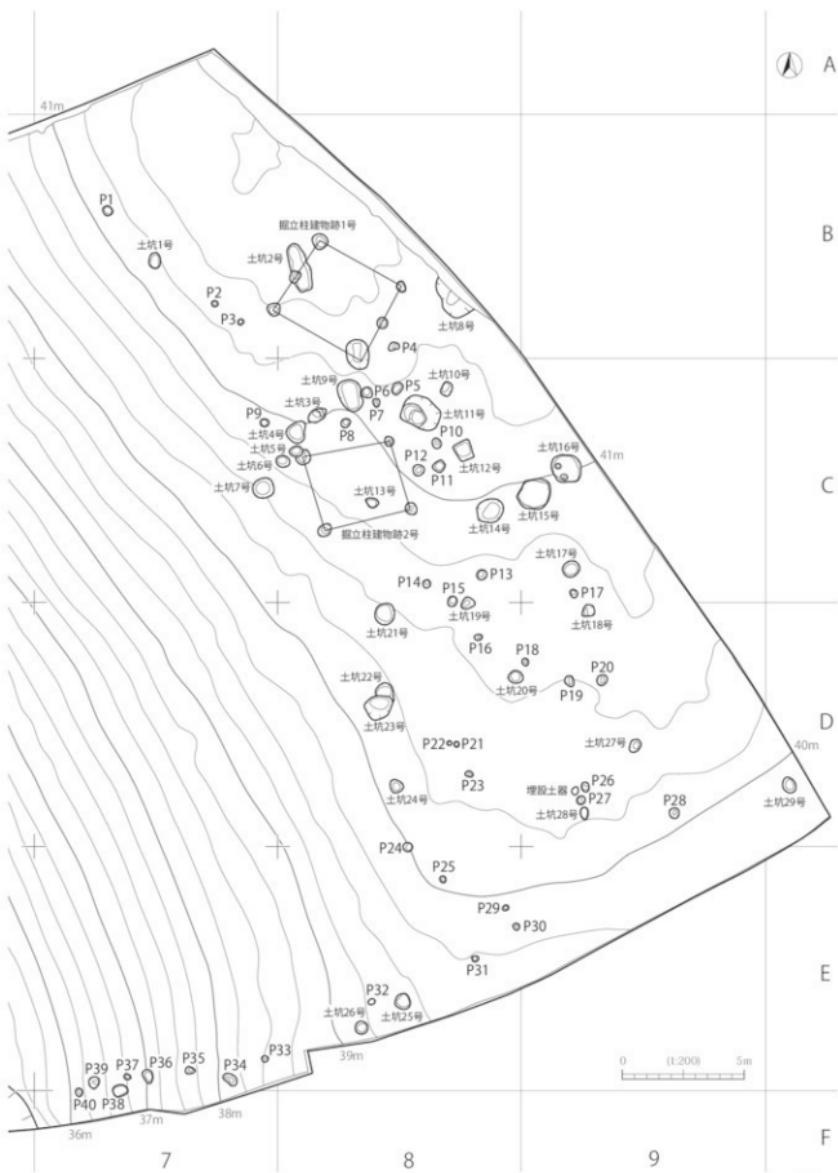
の敲打痕は目立て痕と考えられる。

ピット(第33・34図、第6表)

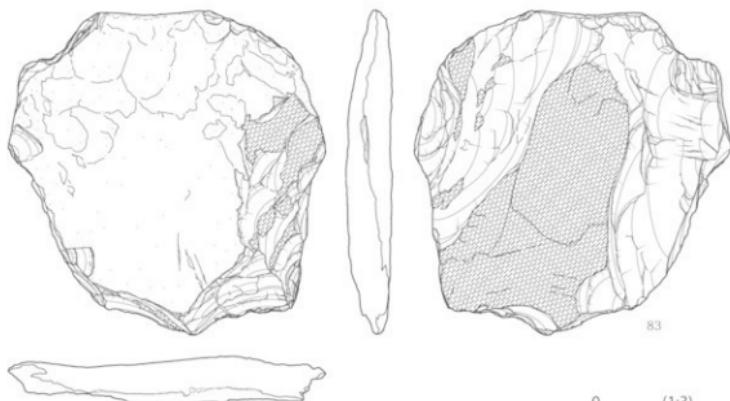
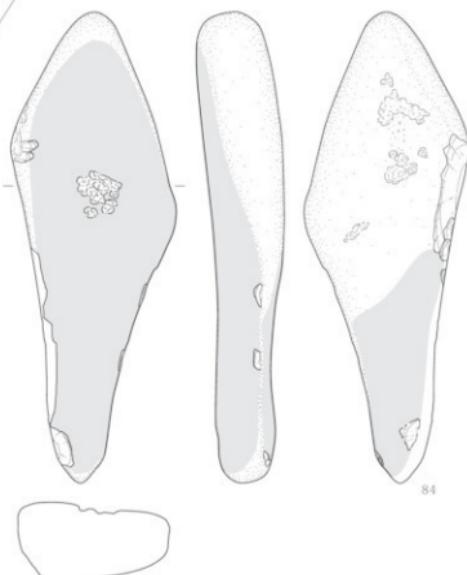
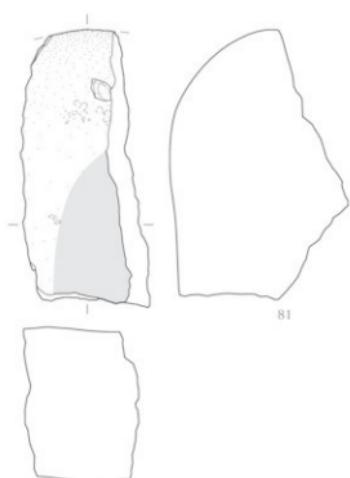
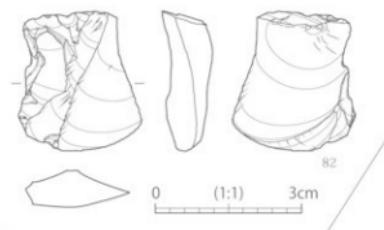
繩文時代のピットは、計40基検出された。各ピットの平均値は40×33cm、深さ25cmで、検出面はいずれもⅦ層上面、埋土は粘性のありシルト質の灰黄褐色土や黒褐色土が主体である。土坑埋土と同じ傾向にあり、ほぼ同時期のものと思われる。P 1～32は調査区東側の上段部平坦面、B～E-8・9区にほとんどが位置し、集中域は見当たらないが高台の平坦面全域から検出されている。明確な柱痕跡はほとんど確認されなかったが、柱穴として掘られた可能性が高く、ある程度の距離で位置している。多くは掘立柱建物跡に関連したピットと推定されるが、掘立柱建物跡1・2号以外は削平による消失などで明確にできなかった。P 33～40は、E・F-7区の略東西方向に並んで検出された。西側へ急激に下る斜面に沿って0.6～1.6m間隔で位置し、約2m下れば捨て場があり、南側約3mには崖が迫っていることから、柵状の施設の可能性も考えられる。

各ピットの計測値は、第6表に示した。

ピットの埋土中から合計で、土器片5点、石器4点の計9点が出土した。この中から石器4点について実測し掲載した。81は、C-8区、土坑11・12号に挟まれたP 10から出土した輝石安山岩製の石皿である。破損しており全体形は不明である。側面に二次加工を施し鋭利な刃部に仕上げている。82は、D・E-8区、土坑21号の南側約3mに位置するP 24から出土した硬質頁岩製の二次加工剥片である。83は、D-9区、埋設土器と土坑28号に挟まれたP 27から出土したホルンフェルス製の二次加工剥片である。表裏に摺理面を持つ大型の剥片が素材である。P 27の北側にはP 26も近接しており遺構が集中している。84は、D-9区、P 27から東へ約4m離れたP 28から出土した砂岩製の砥石である。表全面に研面が広がっているが、両面に敲打による凹みがあり最終的には凹石としての利用である。なお、非掲載の土器片は、P 5・P 19・P 27から各1点、P 36から2点である。



第33図 繩文時代 ピット配置図



第34図 繩文時代 ピット 出土遺物

第6表 繩文時代 ピット規模計測表

遺構	位置	周縁		
		長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)
P1	B-7	0.4	0.4	16
P2	B-7	0.3	0.3	15
P3	B-7	0.3	0.2	30
P4	B-8	0.5	0.3	43
P5	C-8	0.5	0.4	45
P6	C-8	0.5	0.4	32
P7	C-8	0.4	0.3	22
P8	C-8	0.4	0.3	40
P9	C-7	0.4	0.3	16
P10	C-8	0.4	0.4	14
P11	C-8	0.5	0.5	31
P12	C-8	0.5	0.5	36
P13	C-8	0.4	0.4	33
P14	C-8	0.4	0.3	20
P15	C-8	0.4	0.4	21
P16	D-8	0.3	0.3	25
P17	C-9	0.4	0.3	16
P18	D-9	0.3	0.3	30
P19	D-9	0.5	0.4	26
P20	D-9	0.5	0.4	20

遺構	位置	周縁		
		長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)
P21	D-8	0.2	0.2	25
P22	D-8	0.2	0.2	10
P23	D-8	0.3	0.3	29
P24	D-8	0.4	0.4	9
P25	E-8	0.3	0.3	15
P26	D-9	0.4	0.3	26
P27	D-9	0.4	0.4	38
P28	D-9	0.4	0.4	31
P29	E-8	0.3	0.2	11
P30	E-8	0.3	0.3	25
P31	E-8	0.3	0.3	16
P32	E-8	0.3	0.2	18
P33	E-7	0.3	0.2	19
P34	E-7	0.6	0.4	28
P35	E-7	0.4	0.3	28
P36	E-7	0.6	0.4	28
P37	E-7	0.3	0.2	25
P38	F-7	0.6	0.5	26
P39	E-7	0.5	0.4	30
P40	F-7	0.4	0.3	40

捨て場(第35～49図)

縄文時代の捨て場は、E・F-5・6区、調査区南側の縁辺部に位置する。東側の上段から南西側へ下っていく全体地形に沿って検出され、遺構全体のレベル差は約4m弱にもなる。調査区の南端から約5mの斜面より南方向へ向かって縄文時代の土器や石器などの遺物が大量に出土した。出土状況は、調査区南端付近が最も多く出土地点も南側へ向かって徐々に深くなる傾向にあり、崖状に切られた調査区外へ続いていると思われる。検出面から土坑のように人為的に掘り込まれた形跡は確認されず、V層の地山が徐々に南方向へ凹む崖地のような自然地形の場所であったと考えられる。出土遺物の多くは破損品であり、上層から底面まで途切れなく出土していることから、自然の崖地を利用して不要になった土器や石器の廃棄するための捨て場として長期間利用していたと思われる。また遺物の中には、上段部や斜面の土砂が集まりやすい地形のため、遺物を含んだ土砂が流れ込み堆積したものも含まれると推測される。本書では、人為的に廃棄された遺物の集積地であると判断し、検出された遺構として取り扱った。

検出された捨て場の平面形は、長軸が約19m、短軸が約5mの東西方向に細長い不定型な半梢円形を呈し、検出面からの深さは20～30cm程度で斜面に沿っている。断面は浅い皿状を呈し、埋土は、標高の高い東側に遺物が大量に混在した黒褐色土、下位の西側が暗褐色土である。

捨て場から出土した遺物総数は、小破片も含めて6,918点であり、本遺跡出土遺物総数の約半数は捨て場からの出土である。内訳は土器・土製品が5,462点、石器が1,456点で、腹部から下半身にかけて残存した土偶も含まれる。全体が遺物の集中域であるが、5・6区の境界あたりを境に崖地が別れ、東西に2つの大きな凹みが確認される。遺物は縄文時代後期のものが主体であるが、傾斜による流れ込みの遺物も多く含まれることから、使用時期が異なるものが混在している可能性も考えられる。

出土状況は、東側から土器4,449点、石器1,021点の計5,470点、西側から土器1,013点、石器435点の計1,448点である。

出土した遺物の中から、土器・土製品125点、石器83点の計208点について実測し掲載した。



第35図 繩文時代 捨て場

85～93は胎土に纖維を含む縄文時代前期のもので、85～90・94は口縁部で、91～93は胴部片である。85・86は連続する刺突文が巡る口縁部で、87は横位の隆帶上面に連続する竹管文、88は平行沈線文に沿って刺突文を施す。89・90は波状口縁頂部に沈線文を施す。89は円文、90は弧状の短い沈線文を描く。91～93は縄文を施した器面に直線や曲線を用いて沈線文を描く。

95～98は、隆帶文や沈線文を施した縄文時代中期の土器である。いずれも胴部片であり、全体形状は不明である。95は隆帶の渦巻き文を施し、96は縦位と横位の隆帶を組み合わせ区画した内部に縄文を施す。97は縦位の隆帶文、98は斜位の隆帶に沿って刺突文を施す。

99は、横位の短めの押圧押引文が連続する後期初頭のものである。

100～133は縄文時代後期前葉のもので、100～103は細い粘土紐を貼付ける隆帶文を施すものである。100は沈線文と隆帶文を施すが全体に摩滅が見られる。101は垂直気味に開き隆帶と沈線が巡り、102は隆帶に沿って上に横位、下に縦位の短い刻みを施す。103は壺の頸部から肩にかけてのもので、隆帶が2条巡り上面に短い斜位の連続する刻みを施す。

104～112は円盤状やボタン状の突起や横位や縦位の貼付を持つものである。104～107は口縁端部に円盤状の突起を貼り付けたもので、104は円板外縁に鋸歯状の刻みが巡り、下位に大きめの穿孔を施す。105は円板外面に円状に沈線を施し、円内に盲孔を配す。106は鋸歯状の刻みを持つ円板上面が凹む。107は盲孔を施し、108は内傾した口縁内面に粘土を貼り付け肥厚させ、外面に渦巻き状の沈線文を施し、下位に大きめの穿孔を持つものである。109・110は口縁部に平行するようにボタン状の突起を付けたもので、突起は盲孔である。111は内傾する口縁部外面に鉤状の隆帶を巡らすもので、隆帶上位に刻目を施す。112は縦位の隆帶に連続する竹管文を配する。

113～117は沈線による区画や文様を施すもので、口縁部に縦位の刻みや平行する沈線文を施す。113・114は2条1対の沈線文様を描き、114は口縁部外面に短い刻目と盲孔を施す。115は波状口縁に横位の沈線、116は区画された沈線内に連続する馬蹄形押圧を施す。117は内傾する口縁がわずかに反る外面体部に横位と斜位の沈線を施す。

118～121は押圧による縄文や器面調整を施したもので、118は直線的に立ち上がる口縁外面に押圧した縄文を施す。119は器面と貼り付けた隆帶との間に凹みが巡り2条1対の描いた沈線に沿って連続する刺突文が残る。120・121は1個または2個単位の盲孔を施す。

122～131は、口縁部附近に幅広の無文帯を持つもので、122～128は口縁部が内傾し直口または外反するもので、122は底面に網代痕が残るものである。129～131は開く器形を呈した深鉢であり、無文帯が頸部付近を巡る。130・131は無文帯の上下端に縄文の押圧を施すものである。

132・133は体部に単軸絡条体による縄文を施したもので、133は口縁下に無文帯が巡る。

134～154は、縄文時代中期の土器であり、134～137は沈線で文様を施したもので、134は連続した横位の直線を一筆書きで描き、135は口縁端部外面に押圧した縄文が巡る。137は円弧や三角を描き鋭く内傾する特殊な器形であり全体形が不明である。138～140はラッパ状に大きく開くもので、いずれも縄文を全体に施した後に横位または斜位の細い沈線を施す。142～149は区画した沈線内や口縁部内面にミガキ調整を施したものである。142～144は直線的に開くもので、頸部に沈線が巡り全体に摩滅が見られるが、口縁部にミガキ痕が残る。145は横位の



第36図 捨て場 出土土器①

沈線文下に楕円形の沈線で区画した文様を描いたもので、区画内にミガキ調整、区画外に縄文の押圧を施す。146は体部に膨らみを持つ体部が頸部で窄まり開くもので、横位の沈線文が数条巡る。147～149はミガキと縄文を沈線で区画したものである。150～154は、沈線文で描いた文様に沿って連続する刺突を施すものである。154は上げ底の底部であり、外面に数条の沈線で渦巻文を描く。

155～165は縄文のみを施したものである。155は口縁部の粘土折り返しにより厚みを作り出す。159・160は羽状縄文を施し、161は幅広の口縁部中央に穿孔、165はナデ調整を施した底部外面にわずかに網代痕が残る。

166・167は器面に文様調整を施さないもので、166はラッパ状に広がり横ナデ後ミガキ調整を施す。167は薄手の胸部が口縁で肥厚し口唇部に平坦面を持つ。

168は「ぐ」の字状に開くもので、横位の平行沈線文が9条巡る縄文時代晚期の土器である。

169～175は底部である。底部のみ出土のため全体形は不明であるが、169～171は深鉢、172は鉢、173～175は台付深鉢の底部と思われる。169は底面外面に木葉痕が明瞭に残り外面に指頭圧痕が残る。170は直線的な工具ナデ痕、171は網代痕が確認される。172は直線的に聞く胸部が上位で内傾するもので、底面外側に網代痕が残る。173は緩やかに聞く長めの脚が付くもので上げ底気味である。174は円盤状の底部に短い脚が付き、体部との境目外面に沈線が巡る。175は体部と脚部の貼付痕が明瞭に残り、先端が欠損のため脚の端部形状は不明である。

176～179は壺である。176～178はラッパ状に外反する幅広の口縁部を持ち、176は丸みを帯びた胸部中央と強く締まった頸部に沈線が巡り、ラッパ状に聞く幅広の口縁部は波状口縁を呈す。177・178は口縁に2条の平行沈線文が巡り、178は波状口縁の頂部に刺突文を施す。179は算盤玉状を呈す胸部中央に沈線文が2条巡り、上位に斜位の沈線文を施すが全体形が不明である。

180・181は器台である。いずれも端部片であり、180は胸部に三角状の大きな隙間を持ち、隙間に沿って沈線文を描く。181は胸部に隙間を持ち、口唇部に凹みを施す。

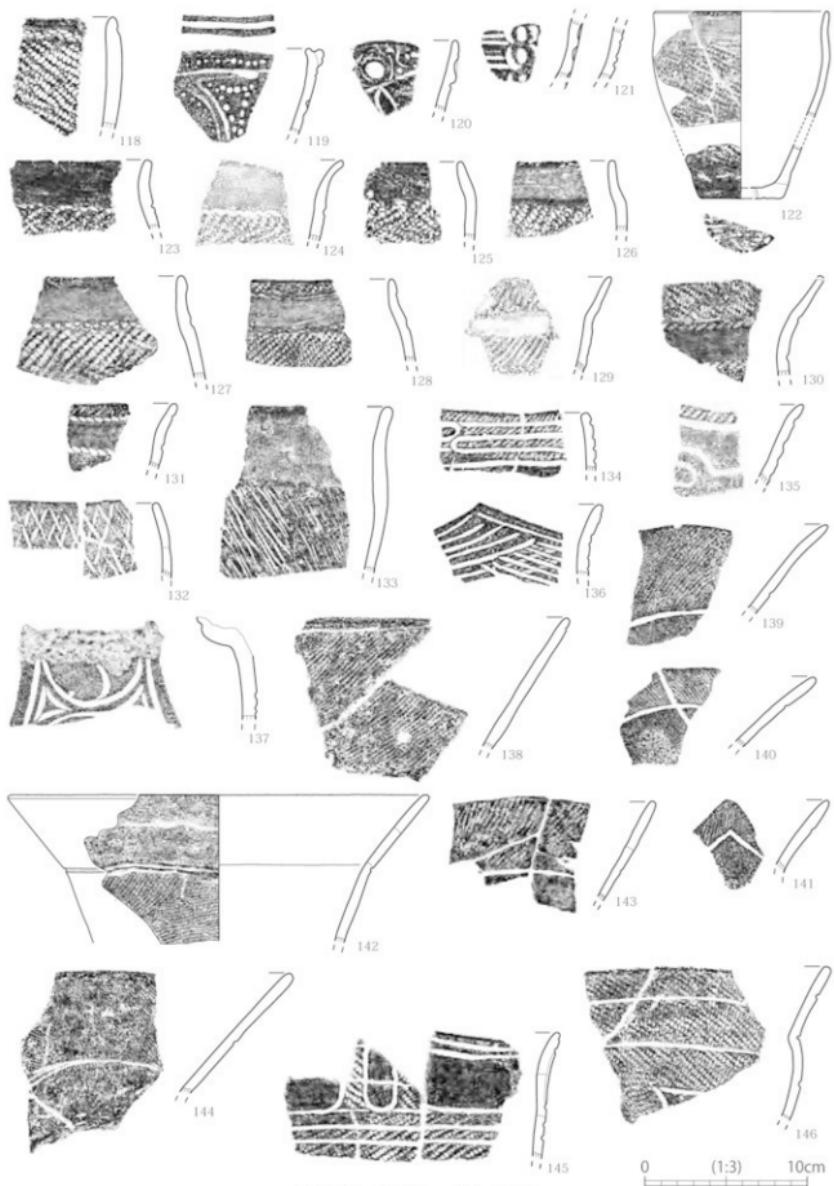
182～191は小型土器である。182～187は小型鉢で、182は波状口縁を呈す皿状のものである。183は頸部が「S」字状に締まるやや細長いものである。184は底部外面に直線状の圧痕が5条残り、185は被熱のため表面が摩滅している。186・187は底部のみで全体器形は不明である。188～191は小型の壺であり、188は丸みのある胸部が窄まり直に立ち上がるもので、上位が歪んでいる。189は逆「L」字状に膨らむ口縁部で、中央に段を持つ。190・191は緩やかに窄まるもので、191は頸部に5条の平行沈線文が巡る。

192は蓋の可能性があるもので摘部が欠損している。

193は弧状に窄まり外面に横位の沈線文や貼付などを施すが、全体形が不明な異形土器である。

194～209は土製品であり、194～208は土製円板である。全体的に平面形態は円形を呈すが、楕円形(204)や方形(198・207)、多角形(199・202・208)、木葉形(195)、扇形(201)、不定形(197・203・206)などもある。土器の胸部片を加工して再利用しており、ほとんどが縁の稜を無くし丸く仕上げている。土製円板の平均は4.4×4.3cm、厚さ0.7cm、重量15.6gである。

209は土偶である。捨て場より4点出土したが、部位が不明確な破片が多く1点についてのみ実測し掲載した。全身形態は不明であるが、腹部から左足首にかけてのもので、頭部、胴体上部、両腕、右足は欠損している。粘土板を折り返して胸部を形成しており、腰から臀部にかけて縱位



第37図 捨て場 出土土器②